



2023 年度
キャリア体験学習（インターン）
報告書

法政大学キャリアデザイン学部

学内・関係者限り

2023年度 キャリア体験事前指導・キャリア体験学習（インターン）報告書

担当教員から～ 2023年度「キャリア体験事前指導」「キャリア体験学習」総括

I. キャリア体験（インターン）について P1

II. 成果報告（体験エッセイ集）

1) 酒井クラス P3

2) 水谷クラス P28

3) 田中クラス P51

4) 松浦クラス P65

2023 年度「キャリア体験事前指導」「キャリア体験学習」総括

キャリアデザイン学部の授業のなかで「キャリア体験事前指導」と「キャリア体験学習」で構成される体験学習は、もともと当学部らしいユニークな授業です。学生は、企業や NPO、自治体などの多様な組織で仕事を体験します。社会人になる前に、社会のなかでの生き方や組織のなかでの働くことを体験することで、学生の立場とはことなる視点から自分を客観的に見つめ直すこととなります。

「キャリア体験事前指導」と「キャリア体験学習」は、2つがセットになり、通年のプログラムとなっています。本学部を特徴づける科目であるとともに選択必修となっており、学生は必ず通らなければならない関門でもあります。履修する学生の多くは 2 年生で、低学年次から実際の企業やさまざまな機関でインターンを経験することを課しています。「キャリア体験事前指導」では、学生は自分なりの職業観・仕事観を身に着けることを目的にグループでの議論を重ね、夏の「インターンシップ」を経ます。そして「キャリア体験学習」はその経験を振り返り、学生が自らの経験を学部の学びに活かしていけるようにと授業が構成されています。

インターンに関しては、三省合意の「インターンシップの推進にあたっての基本的考え方」の改正から、にわかにインターンシップに対しては積極的な姿勢になっている企業が多くなり、インターンシップが採用活動の一貫としての意味合いを強く帯びてきています。多くの学生が様々な企業で仕事を体験することが容易な環境となりました。

そのような社会情勢の変化のなかで、本学部の「キャリア体験事前指導」「キャリア体験学習」も、社会での特別な経験を提供するというだけのものではなく、しっかりと大学教育のプログラムとして展開することを余儀なくされています。働くという経験をいかに学びに結びつけていくかが重要になってきていると考えます。以前に比べ、インターンシップは学生にとって身近な取り組みとなってきました。1 年、2 年生といった低学年次から自らインターンにチャレンジする学生も増えてきているなかで、本学部の「キャリア体験」も際立って先進的な取り組みではなくなってきました。これからの「キャリア体験」というプログラムに求められているのは、インターンという貴重な経験をいかに大学のとくに本学部の学びに結びつけていくかではないかと考えます。また、それが大学のカリキュラムのなかで展開している意味でもあるのでしょうか。

最後になりましたが、本学部のインターンシップにご理解をいただき学生を快く引き受けてくださっている受入先の皆様には、この場を借りて厚く感謝申し上げます。毎年のように仕事のスキルも未熟な学生が現場に行くことにご迷惑をおかけしていると思います。ご理解、ご協力を賜っておりますことに改めて御礼を申し上げます。

担当教員を代表して

酒井 理

I. キャリア体験（インターン）について

授業の趣旨

本授業では、インターンシップをキャリア体験として位置づけ、キャリア体験の学習効果をより高めることを目的としています。

法政大学キャリアセンター『インターンシップガイドブック』によると、インターンシップとは「職場での就業体験」であり、「自らの興味・感心や将来の進路（キャリア）・適性を考えるために、企業・団体などの職場で実際の仕事を体験し、働くことの意味を体感する場」、「社会人の考え方、仕事の進め方、雰囲気などに触れる貴重な機会」とされています。

このようなインターンシップを原則として夏休み中に体験し、その前後の授業で準備や振り返りを行うことを通じて、職業観や仕事へのレディネスの醸成を目指します。授業には、個人での発表や執筆だけでなく、グループワークなど他の学生との協働作業による資料やコンテンツの作成といった、豊富で実践的なプログラムが盛り込まれています。

1. 授業とクラスの概要

本授業は以下の4クラスで実施されています。詳細は各クラスのシラバスを参照してください。

【キャリア体験事前指導・キャリア体験学習（インターン）の4クラス】

クラス	定員数 (名)	取り扱いコース	
		A (大学が用意した先)	B (自己開拓先)
酒井クラス	25	○ そのうち教員が紹介できるインターンシップ先： 9名程度	
水谷クラス	25	○ そのうち教員が紹介できるインターンシップ先： 9名程度	
田中クラス	25	—	○
松浦クラス	25	—	○

資料：「キャリア体験事前指導・キャリア体験学習（インターン）」体験型選択必修科目ガイダンス資料
(2022年3月)より。

※教員が紹介できるインターンシップ先の数は毎年変動します。

キャリア体験事前指導は春学期、キャリア体験学習は秋学期に実施されます。この授業は通年の選択必修科目のため、春学期・秋学期の双方の授業の単位取得をもって科目を修了したことになります（逆にどちらかの単位が付与されなかった場合は通年の選択必修科目を改めて履修・修了する必要があります）。

また、以下のルールは4クラス共通です。

- ①授業は原則として毎回出席（半期欠席3回以上で不可）
- ②授業の一環としてのインターンシップは5日間以上

Ⅱ. 成果報告（体験エッセイ集）

1) 酒井クラス

インターンシップ先・実施期間一覧（酒井クラス）

	氏名	インターンシップ先	実施期間
1	布施 千鶴	Web メディア	長期
2	小沢 理紗	広告	5 日間
3	川瀬 雄太郎	広告	長期
4	竹内 怜奈	セールス	2 か月
5	早川 結子	人材・メディア	長期
6	久保 南実	人材・広告	5 日間
7	竹下 和	人材・マーケティング	3 か月
8	小林 弥叶	Web 広告	長期
9	斎藤 瑛月	経営・不動産コンサルティング	5 日間
10	久田 陽菜	Web メディア	長期
11	野原 未蘭	IT	長期
12	鈴木 悠大	情報・通信	5 日間
13	白根 彩圭	マーケティング	1 か月
14	奥村 侑生	マーケティング支援	長期
15	赤峰 沙都	IT	長期
16	山本 真聖	経営・不動産コンサルティング	5 日間
17	恒川 望	広告	5 日間
18	小川 莉菜	人材・マーケティング	3 か月
19	鈴木 柚香子	人材・派遣	長期
20	三好 陸斗	人材・マーケティング	3 か月
21	日向 美咲	人材	3 か月
22	神山 尚輝	人材・マーケティング	3 か月
23	中村 朋滝	IT コンサルティング	長期

メディア運営会社でのインターンシップ

4年 布施 千鶴

複数のインターネットメディアを運営している会社にてインターンシップを経験した。2023年3月から長期インターン生として就業しており、今講義のインターンシップの主な期間である8月には7日間フルタイムでの就業を行なった。仕事内容は、マッチングアプリの比較サイトの記事執筆、SEO対策案の提案・実行である。

私は記事執筆自体初めての経験であったため、最初は自分が会社のサイトを通じて世に出せる文章を書けるのかととても不安を感じていた。特に間違った情報を載せてしまうと、自分ではなく会社に迷惑をかけてしまうという不安から、マッチングアプリの調査や競合サイトの情報収集などの事前準備を入念に行った。自分が書いた記事が初めてサイトに掲載され、順位がついたときは自分の作ったものが不特定多数の人に見てもらえることに喜びを感じた。

記事執筆に慣れてからは、SEO対策へ注力した。自主的にWebライティングの本を購入し、どのような文章がユーザーから好評を得ることができ結果的に順位が上がるのか、本に書かれている内容を参考にしながら実際の業務を行なった。本には、社員の方からアドバイスをいただいていた内容も書かれていたが、初めて知る知識も多くそれをすぐに実践できる環境がとても楽しく感じた。

また、Google analyticsやGoogle search consoleなどの初めて使うツールの習得にも力を入れた。順位の出し方からグラフの見方、期間やサイト別での比較の仕方を実際に触りながら覚えることができた。しかし、社員の方へ現状の報告・改善案の提案をする必要があったためこれらツールの複数のグラフを見やすくまとめる必要があった。そこでLooker Studioを活用し対象サイトの平均順位やアクセス数、ページごとの順位を見やすいようにグラフをまとめたことで、「報告が他の社員と引けを取らずとても分かりやすい」とお褒めの言葉をいただくことができた。私はこれまで数字を扱ったり地道な作業をしたりすることに苦手意識を感じていたが、この経験から現状を数字から見える情報を使って正しく把握することで改善への正しい筋道が見えてくること、根拠のある提案を行えることを身を持って体験することができた。

インターン期間中、社員の方からのアドバイスを受け改善を重ね、さらに上記のような自分なりの工夫を行なった結果私の担当しているサイトの順位・アクセス数・アフィリエイトによる売上をそれぞれ大幅に上昇させることができた。

記事執筆、SEO対策は初めての経験であり、苦手意識を感じていた分野でもあったが、事前準備の大切さ、新しい知識を積極的に取り入れる楽しさ、数字やグラフを自分なりに可視化して現状把握を正しく行う重要性など、今後社会人になっていく上でもずっと持っていたい仕事に対する向き合い方を学ぶことができたと考えている。

経験と変化

3年 小沢 理紗

私は正直、インターンへの参加が必須の課題であることに疑問を抱いていた。インターンには参加しなければならないとは感じていたが、「授業でいかなければならないから、しょうがなく行く」というスタンスではそう大した実りは得られないのではないかと考えたからである。しかし、実際に自分自身が参加してみて考えが変わった。インターンへの参加には大きなメリットがあった。

私は自分が頭の中で考えたことを何かしらの形として、アウトプットする事に喜びを感じるため、広告代理店でのインターンに参加した。主な業務としては、クライアントから提示された求人の広告を作成し、実際に求人誌やその web 版に出稿し、簡単に効果測定を行うという内容であった。基本情報を元に、ヒアリングや細かなペルソナ設定を行い、キャッチコピーや誌面の内容を、限られた文字数の中で、いかにクライアントの情報と求職者のニーズとをマッチさせることができるかが重要視されていた。

今回、私がこのインターンに参加しようと思った理由がもう一つある。それは、自分自身の言語化能力を向上させたいと日頃から感じていたからである。私がなぜ言語化能力が不足しているか考えてみたところ、自分からの言葉の発信の機会が少ない、相手に過大な理解を求めてしまっているなどが考えついた。そこで、相手も見えない場で伝えたいことを限られた環境で伝えることが求められている場所での経験を積みたいと考えた。実際に広告作りを行っていく上で、広告の原稿を出稿する前にも、たくさんの言葉が必要とされた。どのように話すことで自分の聞きたい情報を得ることができるのか、どの言葉を使えば伝えたいことを正確に伝えることができるのか、などと考えながら言葉を選びすぎり、話し、書き起こすことが常であった。初めは普段よりも考えを巡らせながら話すことに疲労を感じることもあったが、段々と慣れ、自分が望んでいた答えを一発で得られた際には喜びも感じられた。そのような成功体験が私には必要であったのではないかと感じた。以降、自分の発言に対し、自信を持ち、躊躇なく発言できる場が多くなった。これが序盤に述べた私が感じたインターンへの参加のメリットのひとつである。参加しなければ得られなかった経験であった。

これまで私が発言することに対して躊躇していたのは、否定されることや間違いである事への恐れであったと思うのだが、今回の経験を通して、自分の考えは発信してみないことにはそれが正しいのか間違っているのかも分からないし、他人からの意見を得るには自己開示が必要であると改めて実感した。もちろん自分が常に正しいことはないが、自分を受け入れ、誤りや否定を恐れずに積極的に自分を発信できるように留意し、その自分の言動が自分の財産になることを日々忘れずに過ごしていきたい。

想定して準備すること

2年 川瀬 雄太郎

私はこの夏休みから、求人情報サイトを運営している広告系の企業に、業務委託という形でインターンに参加した。形式はオンラインとオンデマンドで、主にオンラインでのインタビューと、それに基づいた記事作成の業務を行なった。インタビューは、この企業に属している社会人を相手に聞き、記事はこの企業を受けようとしている人に向けた、企業紹介の記事である。

私がこのインターンを通して一番強く感じたことは、自分の実力不足である。中でも、インタビュー中心であったことから、主に話す力が一番不足していると感じた。他にも、記事作成ではインタビューで得た情報を要約する力も足りていなかったと感じる。

初めに、なぜ話す力が足りなかったのかは、自分が社会人とフォーマルな状況で話すということに慣れていなかったことが考えられる。オンラインではあったものの、自分がインタビューしたことが記事という形で多くの人の目にふれる可能性があること、社会人を相手に学生が様々な質問をする立場の差に緊張を感じていた。インターンに参加するまでは、自分は目上の人とも同年代とも話すのは得意だと思っていた。しかし、実際にインタビューをしてみると思うように言葉や質問が出てこなかった。次に、得た情報を要約する力は、自分の読解力がなかったせいだと考える。実際に記事を作り始めてから三回ほどフィードバックを受けた。自分ではインタビューした内容での要点をまとめたつもりであったが、内容が薄い、少し本質とずれることがあった。恐らく、インタビュー内容を読み返して、重要だと感じてまとめたポイントが的外れであったと考える。もし自分に読み解く力が備わっていたなら、インタビューで得た情報を端的にポイントだけ押さえて要約できたのではないかと考える。

これらの問題に共通していることは、圧倒的な経験不足であったと考える。もし社会人と話すことに慣れれば、もし文章を書く経験を多く積んでいたら、それに沿った行動ができたはずである。しかし、それではなぜ早めに経験を積まなかったのか、経験を重ねればできるようになるのかという疑問が生じる。この問題は、早めの段階からインターン等に参加する等しか解決するには至らない。そのため、今回のインターンで一番重要だと考えたことは、事前に準備をしておくことである。インタビューの際も、相手の答えによって質問を変え、それにリアクションするため、質問だけではなく、相手から返ってくる答えまでシミュレーションしたより深い準備が必要になってくると考える。また相手の基本情報等を押さえ、相手のレベルにあった質問をすることも必要である。他にも、記事を作成するのであれば、どのような記事が世の中に出回っていて、どのような書き方をすれば読者に伝わりやすいのかを学ばなくてはならない。今回、このような準備を怠ったことが、自分の実力不足を感じる要因になったと考える。そのため、今後新たなインターンや就活、留学など自分が経験したことのないようなことを行う場合は、これまで以上に調査を行うことや、考えられられるパターンをシミュレーションして、どんな状況であっても臨機応変に対応できるような準備を行なっていきたい。

新たな学びと自分の短所

2年 竹内 怜奈

私は7月下旬から9月中旬までの約2カ月間、社会貢献ビジネスを行う会社でセールスのインターンシップを経験した。主な業務として、個人や法人などに対しての新規顧客開拓を行った。初日には、社会人マナーや取り扱っている商材について学び、翌日からは営業のスキルを学びながら、実際に現場に出て、新たな顧客の獲得に勤めた。インターン先を見つけるにあたって将来やりたいことが特になかったのだが、営業の仕事を経験としてやってみたいと思い、あえて自分が苦手だと感じていた営業職でインターンシップを経験した。今回のインターンシップでは、本当に多くのことを学んだが、大きく分けて2つの学びを得られた。

1つ目に、営業の楽しさを知ることができたことである。インターンシップを始める前までは、営業職に対してあまりいいイメージを持っていなかった。しかし、実際に経験したことによって営業職のイメージを変えることができた。元々あまりいいイメージを持っていなかったためか、自分の想像よりも楽しいと感じたのが率直な感想である。ネガティブになってしまうこともあったが、顧客を獲得できたときにやりがいを感じられたり、自分の成長を実感できたり、振り返ってみると楽しいと感じる方が多かった。私の性格上、こうだと考えたことは絶対にこうだと頑なに思い込んでしまい、その思い込みを解消するのに時間がかかってしまう。そのため、今後就職して営業に配属されたときに、このインターンを経験していなかった私だったら、やる気を失っていたと思う。このインターンを経験していなければ、営業職に対してのイメージをずっと払拭できずにいたので、就職活動前にこの気づきを得られたことは自分の中でとても大きく、意味のあるものだった。

2つ目に、私は、報告・連絡・相談が疎かになってしまっていたことに気づいた。今忙しいかなと思って自分から話しかけにいけないというように相手に対して変に遠慮してしまったり、これくらいなら大丈夫だろうと自分の尺度だけで判断してしまったりして、報連相が疎かになってしまった。また、報連相の中でも連絡が一番欠如していて、連絡の遅さを改善しなければいけないと感じた。連絡が遅くなってしまうことは、信頼関係を崩してしまう行動の1つになると実感した。普段から連絡を後回しにしてしまう癖があり、プライベートと仕事の返信のスピード感を十分に棲み分けできておらず、プライベートで連絡を返すようなスピード感で返信していたために起きてしまったと振り返り、改善していかなければならないと気付かされた。

また、一番考えが変わったことは、結果で判断されることが多いということだ。私は思うような結果が出なくても、それまでの過程において自分が頑張ったと思えばいいという、結果よりも過程を重視した考えを持っていた。しかし、社会では結果が全てで、結果を出しているからこそ過程も見てもらえることを実感した。この経験では本当に様々なことを学ぶことができ、いい経験になった。しかし、それを良い経験として終わらせるのではなく、得たものを忘れずに、自分自身を成長させていきたい。

なぜかと自分に問う

2年 早川 結子

私は今回人材系の企業のメディア事業部でインターンを始め、現在も続けている。業務内容は自社メディア内で出す記事の作成から公開までの作業が中心だ。入社後2, 3か月は記事執筆前に必要な構成案の作成から始まり、SEOの知識を身に付けながら現在は編集やリライトの仕事を任されている。

私がインターンを始めて最初にぶつかった壁が仕事の量である。私が入社した頃はメディア事業部が立ち上げ時期だったため、とにかくまずは記事を一定数出す必要があり当然スピードを求められた。私は何かやる時常に完璧なものを出そうとするため時間がかかる。質が高いものを生み出せるのは強みだが、このように組織として量が必要な場合これは弱みになった。これまで何かしらの強みがあればよいと思っていたが、本当に必要とされるのはその状況で組織が必要とする能力だと感じた。私は将来組織に属して働くことを想定している。そのため企業が求めるのはどのような人か考えるようになった。

企業が求めるものとして、事前学習とインターン中に考えていたことの1つが「主体性」である。これは今の自分に圧倒的に足りないものである。インターンを始めて数か月が経った頃、他のインターン生が自主学習の内容を共有したり、自ら組織に新たな仕組みを導入したりするようになった。この状況に対して私はなぜ自分がその行動に至らなかったか、なぜその差が生まれたのか考えた。私に主体性がない理由の1つが、今の仕事に興味を持っていないことである。仕事以外で私は興味を持ったことに対して自ら挑戦できている。自分が関心あるものでなければ、自らもっと良くしようという発想すら生まれない。好きなことや向いていることを仕事にした方がよいと言われる理由もここにあると感じた。

また他の理由として、目標がないからではないかと考えた。私は特に興味のないことに対しても努力できる。だがいくら仕事の質が高かろうが、結局は与えられたものをただ熟す人間でしかない。目標を設定すれば現在の課題が明確になり、改善しようと努力できる。目の前のことに一生懸命になれるのはよいかもしれないが頑張りには限界があり、その先がない。なぜこれまで目標を立てることができなかったのか考えたが、おそらく私は目標を立てそれが達成できなかった状況を恐れているのだと思う。初めから目標を立てなければ失敗もなく楽である。だがそれでは成長がない。この先自分が行きたいと思う企業が見つかりそこに就職したいと思った時、単純に行きたいという思いだけでは通用しない。自分が理想とする未来を実現するためにも十分な能力や資質が備わっている人間でなければならない。

私はこの経験を通して自分に足りないものを思い知らされた。そしてなぜそうなったかと自分に問いかけ、振り返ることで課題が明確になった。自分の弱い部分と向き合うことは大変であり嫌なことでもあるが、成長するためには必要な時間である。今は興味のあることに挑戦してみようと考え広告系のインターンを始めた。まずは小さな目標を立て、そこに向けて行動し反省を繰り返すことが今の私には必要だ。今回をきっかけに膨大な課題も見つかったが、同時にこれを成長の機会にしようと思前向きに捉える自分もいる。今後も自分と向き合うことを恐れず、成長し続け、社会で活躍できる人間になりたい。

インターンを経て振り返る

2年 久保 南実

8月27日(日)から8月31日(木)の5日間にかけて、人材・広告企業で企画職のインターンに参加した。大学1、2年生の低学年向けのサイトに出す企画をチームごとに考え提案するというものであった。初日は、実際に会社に行きインターンの趣旨の確認をしてチームに分かれ、2日目から4日目はオンライン上で話し合いを重ね企画をかたちにしていき、最終日に会社の社員の方々に対してプレゼンをするという課題解決型の内容のインターンであった。

今回、インターンに参加するにあたって働くことのイメージをもつということと、活動を通して現時点で自分に足りていない部分と自分の持ち味を把握するという目標をもって臨んだ。その目標を達成するために、普段やることのない立ち回りにも挑戦するなど、常に積極的な姿勢でいること、他人からもらったアドバイスや周囲の人の良い行動などを振り返ることを意識して行った。全体の振り返りとして、できたことはスタッフの方のアドバイスを聞き、それをすぐに改善するように行動すること、またチームのメンバーの良い部分を観察し自分も真似して、学ぶということだ。それによって、自分のできていないことを把握することができた。例えば、オンラインでの企画会議の際に時間管理をせず、最終的な目標に向けてどう話をしていけば良いか明確にしておらず目の前の議題についてだらだらと話してしまった時、そこで時間をちゃんと区切ったり、話をまとめたり役割を担って効率的に話を進めていくことが必要というお話をいただき、そこから最終プレゼンから逆算して今なにを話すべきか言語化し、話し合いの方向性を共通で認識できているかを確認するようにすぐ改善した。また、中心となって話をしきる役割の人の話し方に注目して、どのように人の意見を聞いているかを観察することで、相手の意見を一度聞き疑問をぶつけたりすることで面白い考えが出てきたり、自分たちの目指すこととは別であることが明らかになり方向修正ができたりすることが分かった。一方で、できなかったことは、常に積極的であるということだ。アンケートを取ってデータを集めたり、プレゼンで発表者をやらせてもらったりということはできたが、特に話し合いの場面において消極的であったり、人に委ねてしまっている部分があったと振り返る。グループでの話し合いにおいて、話を進行していく立場や、率先して意見を出していくことができなかった原因は、失敗を恐れたということである。自分の意見や話し方によって、うまく話をまとめていける自信がなく自分の言動でペースを停滞させてしまうのではないかと考え行動することができなかった。

インターンを経て、現時点での自分を知ることと企画職についてのイメージを持つことはできたが、それと同時に社会人になるにあたって自分自身の未熟な点が多々見えた。今回のように初対面の人とコミュニケーションをとって共同で働くことや、数名で話し合いをする場面は当たり前になってくる将来、自分がそこでいきいきと活動できるために今後、失敗を恐れず、評価されることを避けず挑戦する機会を沢山経験していこうと思う。

責任感とは

2年 竹下 和

私は、人材コンサルティングマーケティングを行っている企業で約に 2 ヶ月間インターンシップ活動を行った。インターンシップでは「若者のキャリア観を明らかにする」ことをテーマに、3 人のメンバーとともにミーティングを重ねながらレポートを作成した。

今回のインターンシップを通して、私が最も考えさせられたのは「責任感」についてだ。「責任感がなかった。」とよく聞くが、責任感とはなんだろうか？何ができていれば責任感があるという状態になるのか、私は疑問に思った。

インターンシップを終えて、私は責任感とは自分の役割を明確にし、その理想を描くことではないのかと考えた。この考えに至った理由は、責任感はある自分のやるべきことが明確になって初めて生まれるものだと思うからだ。インターンシップが始まってすぐに、企業への進捗状況に関する連絡を怠ったことで、企業に迷惑をかけてしまった経験がある。この経験を振り返ると、当時は自分がリーダーであるという自覚はあったものの、リーダーが何をすべきか、期限にどのような資料をアウトプットする必要があるのか不明確だったことで、何をすべきかが曖昧で、自分の行動に対する責任を果たせなかったのだと思う。

この気づきから、会社とのミーティングで資料の理想的な状態を共有し、自分自身にリーダーとしての役割を明確にする習慣を身につけたところ、以前は他人の評価を非常に気にし、必要なことを言うことができないことがよくあったが、自分でリーダーの理想を描くようになってからは、他人の評価よりもやるべきことを優先するようになった。その結果、アドバイスを提供したり、必要な指摘を行ったりできるようになった。会議の際には、ゴール状態を事前に考えて、議題を設定してから実施できるようにまでなった。このプロセスの改善により、最終アウトプットまで漕ぎ着けることができたのだと思う。

また今回のインターンシップでは自分の今後のキャリアを選択する際に大事にしたい考えについても学ぶことができた。私が大事にしたいのは「自分の人生を生きる」ということだ。私は、「大企業で収入のいいところで働く方が幸せ」や「結婚した方が幸せ」などの世間一般の幸せに流されてしまう傾向がある。しかし、それは私の幸せではない。「自分なり」の幸せやキャリアを見つけるために、自分の深いところにある本当の気持ちと対話しながら選択を繰り返していく必要があると感じた。そして、インターンシップ中に行ったウェルビーイングワークの中で見えてきたものがある。それは私が周りの人が喜んでいたり、笑顔な瞬間を見たりするのが好きで、人の感情に変化をもたらすことができた瞬間が自身のウェルビーイングにつながっていることだ。まだ、仮説ではあるが、このようにして自分の幸せな時間は何なのかの仮説を持ち、その仮説を検証するために、新たなチャレンジや今の生活に工夫をしていきたいと思った。

自分が身につけるべき能力

2年 小林 弥叶

私は、東京タワーの近くにあるビルで、旅行おでかけ CGM サービス事業の長期インターンを行なっている。具体的には、渋谷のお洒落カフェ 10 選や、クリスマスに訪れたいスポット 12 選、福岡で一泊二日のデートプランなどを自分で調べて、情報をピックアップして記事にする。また、以前書かれた記事のファクトチェックや閉店チェックなど更新記事を書くというライティングの仕事だ。元々、広告の言葉に心を動かされた経験があり、広告の仕事に興味があったことと、旅行おでかけ情報を知ることは、今の自分にも需要があると思ったことからこのインターンを選んだ。初めてのインターンで身につけるべき能力や感じたことが多くあるので書いていきたいと思う。

一つ目は、情報収集とピックアップ能力だ。記事を書く上で、自分で情報を収集し、どの情報をどのようにピックアップして書くかが重要になってくる。仕事をしていくうちに、基本情報にプラスして、自分が行くとなったら知っておきたい注意点やお得な情報を書くようにした。大学でも自分自身で情報を得ないと重要な連絡が伝わらないこと、普段ニュースでも自分で情報を取捨選択する必要があると思う。情報収集とピックアップ能力は、今後生きていく中で、身につけるべき能力だと考えた。

二つ目は、語彙力だ。同じ記事だとしても伝え方で、読みたいと思うか行きたいと思わせられるかわ変わってくると思う。多くの人に影響を与える記事を書くには語彙力が必要だと感じた。同じ言葉をなるべく使わない、最大限に良さを表現できる言葉や擬音を選ばなくてはならなかった。日常会話をするときには”やばい”など何にでも応用できる言葉で会話をしていることが多いと感じた。だから、普段からより伝わる綺麗な表現を心がけること、語彙力を増やすために本を読むことや人とたくさん話すことを実践しようと思った。

三つ目は、オリジナリティだ。自分のオリジナリティのなさに力不足を感じた。選ぶスポットがどの記事にもあるような定番ばかりになってしまったり、特別読みたい・足を運びたいと思わせるような文章や画像でなかったりと、物足りなさがあった。私の記事は至って普通で、多くの人に見てもらい SEO を伸ばすためには、オリジナリティが必要だと考えた。思えば、私はずっと普通な子で、飛び抜けて自慢できるようなこともないし、むしろあまり目立ちたくなかった気がする。その原因の一つに自己肯定感の低さがあると思う。まずは、自分のことをもっと知り、いいところも悪いところも受け入れて、自分自身と向き合う必要があると考えた。そこから自分だけの武器を手に入れたい。

今回のインターンシップでの経験は、自分自身について見つめ直し、身につけるべき能力を考える機会になったと確信している。私の身近な人も多く利用しているサイトで、最初に自分の記事が世の中に掲載されたときはすごく嬉しかったのを覚えている。そんな見てくれる人たちの役に立ち、実際に足を運んでくれるような記事を書くために、自分自身をレベルアップさせたいと思う。私はこのインターンを通して、人の心を動かす言葉を生み出せるような人になりたい。普段の自分自身を見つめ直して、力を強める良い機会になったと考える。

失敗から学ぶ

2年 斎藤 瑛月

今回私は、金融コンサルティングを事業とする企業のインターンシップに参加しました。主な仕事内容はオフィスの清掃、郵便物の回収や仕分け、受領物リストへの記入、データの入力、プロジェクトの立ち上げに関わる資料や送付状の作成、製本作業や書類のPDF化、郵便物の封入作業、そしてコンサルティングに関わる演習でした。主にバックオフィス作業を行いながら午後の2~3時間は演習問題に取り組むという形で、月曜から金曜の5日間、業務に従事しました。

インターンシップに参加するための準備として、人が働く意味や、会社・組織に必要とされるのはどのような人材かなどについて、自分で考えたり社会人へインタビューしたりしてより考えを深める作業をしました。そしてそれをグループ内で共有し、違う意見を聞くことを通して、インターンシップに臨む心構えを持ちました。私は、インターンシップに参加するにあたって、人と関わる際の礼儀と愛想の良さを大切にすること、そして業務や社員の皆様との交流からさまざまなものを吸収しようとする積極的な姿勢を持つことを目標としました。

私は、今回のインターンシップを通して、他人の時間をいただくことに対する自分の責任感の甘さを感じました。企業の一員として働くということは企業を背負っているということであり、社内の方々はもちろん、社外の方を相手とする上では一つのミスで何人もの人を巻き込むことになり得ます。そのミスを防ぐためにも、実際の業務では送付状と封筒の宛名に相違がないか何度も繰り返し確認したり、送信するメールの内容や添付ファイルを隅々まで確認したりと、念には念を押した丁寧な業務が大切だと教わりました。自分の行動ひとつで、誰かの時間を奪ったり余計な労力をかけさせたりすることになると思うと、ますます丁寧に抜かりない行動をしなければならないなど、あの時の私は頭では理解していました。

しかし、インターンシップ後、このエッセイを書くための面談の際に、私は面談スケジュールの確認を怠り、おふたりの先生方の貴重な時間と労力を奪ってしまいました。インターンシップでの業務を通して、「自分の行動に責任を持つこと」「何事にも念には念を押して確認すること」の重要性を学んだはずが、このような失敗を犯してしまったのです。この失敗を重く受け止め、反省すると同時に、私はインターンシップで学んだことを本当の意味で身につけられていなかったと気づくことができました。実際の業務を経験し、いくら頭では理解していたつもりでも、実際の失敗から学ぶことの方が大きいのだと学びました。

今回のインターンシップで学んだはずのことを、私は本当の意味で身につけることができていませんでした。しかし実際の失敗を通してやっとそれに気づき、反省することができたのです。ご迷惑をおかけした先生方には大変申し訳ない気持ちでいっぱいですが、それを注意していただき、自分の行動や考え、意識の甘さを反省する大きな機会をいただいたことには感謝しています。今後は、インターンシップや今回の失敗から学んだことを、自分の行動にしっかり反映させたいと思います。

伝えることの難しさと重要さ

2年 久田 陽菜

私は半年ほど前から、人形町にある Web メディアを運営する会社で、インターンシップをおこなっています。主な業務内容としては、サイト会員に向けたメールマガジンの作成・分析や、サイトの UX デザインの改善に関する提案・依頼です。また、上記以外にも、社内外で行われる会議や、外部のイラストレーターやエンジニアの方への業務依頼なども経験しました。私はこれらの経験を通して、大きく分けて二つのことを学びました。

一つ目は、人に言葉で情報を伝えることの難しさです。私は業務上、オンラインで人と連絡を取る場面が多く、画面上で依頼内容や自分の意見を伝達することに苦戦しました。メールマガジンに載せる画像を新しいものに切り替える際には、イラストレーターの方に依頼内容がうまく伝えられず、何度もやり取りを繰り返してしまいました。この部分のやり取りが長引くと、どんどん施策開始が遅れ、チーム全体へ迷惑がかかってしまうという状況で、当時はもう全てを投げ出してしまいたい、という気持ちでした。しかし私は、イラストの元となる記事が伝えたい内容をイラスト化する作業において何が足りないかを考え直し、記事作成者→チームリーダー→依頼担当者（私）→イラストレーターという流れの中で、記事作成者の方にコンタクトを取ることにしました。記事作成の意図や参考にしたサイト、その人がそこからイメージしたイラストなどをお聞きして、もう一度依頼書を作成したところ、何のつまずきもなく、本来依頼したかった内容を伝えることができたのです。ここから私は、他者に情報を伝える場面では、自分が伝えられたことをそのまま伝えるだけではなく、情報自体への理解を深め、その際自分が必要だと感じた情報を加えて伝達することが重要なのだと学びました。

二つ目は自分に対しても他者に対しても素直でいることの重要さです。私が所属しているチームでは週に一回、定例ミーティングがあります。そこでは、1 週間の業績報告や他チームからの連絡事項の共有などが行われ、余った時間で売り上げを上げる施策について話し合っています。最初、私は所詮インターン生だし、という気持ちから、何かアイデアが浮かんだり、他の人のアイデアに思うことがあったりしても、遠慮がちであまり発言できていませんでした。しかし、業務レクチャーで同じチームメンバーと一緒に、定例会では話せない気軽な施策会議をしたことをきっかけに、私でも社員の方々と同じ裁量で参加していいんだ、と気がつき、新規施策の提案や共感などを積極的に発言するようになりました。そしてその結果、上司との個人面談の際には、自分の意見を発信しながら他者の意見を受け入れる、素直な姿勢を評価していただくことができました。

このインターンシップを通して私は、以上のことを学んだと同時に、自分の視野の狭さも実感しました。業務の中で何か問題に直面するときは、自分の目の前だけではなく、周りにある情報に目を向けられていなかったことが原因であるケースが多かったです。来年に迫る就職活動に向けて、この 1 年で私は、第三者の目線から自分の置かれた状況、そして自分自身を分析する力を身につけたいです。

会社で働くということ

2年 野原 未蘭

私は2023年7月から現在まで継続してITベンチャー企業でwebライターのインターンシップに参加している。業務内容としては金融系メディアの記事作成であり、最初の試用期間中から自社のwebサイトに投稿する記事を書かせていただき、現在では月に5本ほど記事を作成し公開している。この職場では部署やチームを問わず社員さんとの距離が近く、インターンシップ生の意見が非常に反映されやすい職場環境であった。

私が今回体験型科目でキャリア体験事前指導（インターン）を選択した理由は、企業で働くことを学びたかったからである。なぜなら、私は現在公益社団法人日本将棋連盟に所属する女流棋士として活動しているからだ。日本将棋連盟には所属しているのだが、棋士という職業は会社員とは異なり、個人事業主である。他の学生に比べると社会人としてのスタートは早いですが棋士という職業柄、普通の社会経験がない。昨今の将棋界ブームによって、棋士の仕事も複雑化していると感じる。今回のインターンシップで企業で働くことを体験することは棋士としてのキャリアにおいても必要なことだと感じ、インターンシップを選択した。

今回のインターンシップを通して、今まで自分自身と真剣に向き合うことを避けていたことに気が付いた。まず、今回のインターンシップを選択したことも企業で働くことを学びたかったからであるが、インターンシップにはいつでも参加することできた。会社で働きたいとは思っていても行動に移せていなかったのである。また、インターンシップの業務でも与えられた仕事を遂行することだけで、意見をなかなか出せなかった。折角の企業で働く経験を活かしきれていないと感じることも多く、自分自信と向き合えないといけなかったと感じた。

また会社で働くことの大変さを強く実感した。会社員と個人事業主の大きな違いとして、会社員は会社に雇用され、就業規則に従い働き、個人事業主の働き方は個人の裁量にゆだねられる点である。会社で働くということは個人ではなく会社全体の利益を考えて行動する必要がある、報連相やコミュニケーションを密に取る大切さを学んだ。また個人事業主とは違い個人の裁量だけではない点が大きかった。企業で働くことは個人ではどうにもならないことも多く、一人ではなく大勢の力で会社が成り立っていることを感じた。

今回のインターンシップは学びが多く、自分自身について深く考えるきっかけとなった。今後の人生設計においても会社で働くことを体験できたことは大きく、棋士というキャリア設計においても大事な資産となった。この経験を活かして今の自分に足りない点を見つめ直し、課題を把握して成長につなげていきたい。

本当の「知る」とは

2年 鈴木 悠大

私は将来、以前住んでいた地域で暮らしていきたいと考えているため、その地域の企業を知るべく地方インターンシップに5日間オンラインで参加した。内容は、当地域の企業3社について、各会社が直面している課題や、普段どのような仕事をしているかを知り、実際に営業体験としてロールプレイングや、与えられた課題に対してグループで1つの答えを導き出すといったワークを行った。

今回のインターンシップでの1番の気づきは、自分の視野の狭さだ。視野の狭さを感じた場面が2つある。一つ目は地方の中小企業について、私が無知と言えるほど何も知らなかったことである。私が伺った中小企業は若者の人材不足に悩まされていた。また、数年前まで、学生に向けた就職活動の宣伝はマイナビやリクナビなどの就活サイトではなく、近隣の学校へ出向いて行っていたとおっしゃっていた。私は、中小企業についてはっきりと知識がなかったとはいえ、今すぐ人材を必要とし、まして就活サイトに登録できずに学校まで足を運んでいた企業があるとは知らず、驚いてしまった。人材不足に悩む企業があることは知っていたが、それは表面上の知識だけで、本当に知っていたとは言えない。むしろ、企業について勝手に誤った思い込みを抱いていたと言える。私が当たり前だと考えていたことは、実際に世間では当たり前ではないことを思い知らされた。二つ目はグループワークを行ったとき、自分の意見と周りの意見の視点の相違に圧倒されたことである。自分では適当であると思った発言をしても、それはあくまで自分がこれまで体験してきたことの中だけであって、異なるバックグラウンドを持つ人々から見ると、全く違って、また異なる意見が次から次へと出てくる。これまで学生としての枠組みで活動してきたため、意見の相違はそこまで大きな違いを持たなかったが、学生の枠組みを超えてほかの視点が増えると、全く異なる視点が浮かび上がるように感じた。

ここでの私の課題は自己認識が不足していたことである。自分の今いる環境が当たり前だと、知らぬ間に思い込んでいて、それに気づいていなかった。「無知の知」という言葉があるが、私はその逆で、自分が実は何も知らないことを自覚していなかった。ここで、問題は知識が不足していることではなく、知っていたつもりになっていること、そして知っていると思って、実は知らないことを知ろうとしないことが私にとって1番の問題であり、これが私の視野が狭い理由であると考えた。

今回のインターンシップは自分が社会についていかに無知であるか、そして社会を知っていたつもりになっていたことを思い知らされる機会となった。同時に、これまでどれほど狭い領域の中で自分が人と関わってきたかも知ることができた。今回のインターンシップでは、知ったつもりになっていたことが大きな問題につながることはなかったが、今後社会に出たときには十分起こりうることである。自分が社会のことをいかに無知であったか知ることができたのは1つの成長であるが、私がこれから視野を広げるためにやっていくべきことは、自分のこれまでの知識に頼らず、あらゆる媒体から情報を自分で取りに行くこと、実際の現場に触れること、そのような環境と接する機会を増やすことだと考える。本当の知るとは、そこからはじまるのかもしれない。

自分を見つめなおす

2年 白根 彩圭

私はビジネス開発支援事業やマーケティング支援事業などデジタル領域を軸とした統合デジタルマーケティング会社の人事部として、1か月間インターンシップ活動に参加した。主な業務内容としては面接日調整、中途の求職者管理、電話対応を行った。そしてこのインターンシップの経験を通して、自分自身の新たな弱点を発見した。

まず、私は体験型事前指導の課題では自身の働く意味をお金を稼ぐことはもちろん、社会貢献や誰かにとって喜ばしい状況を作り出すことと定義しており、実際にアルバイトなどの経験を振り返ってみても私は人との繋がりを通じて何かを生み出すことに価値を感じていた。またこのインターンシップを選択した理由としても、大学の授業で人事について学び、アルバイトの経験からもともと興味があった組織作りに対して更に関心を持つようになったためである。しかし実際の業務は、想像以上に事務作業が多い職業であり、人との関わりはほとんどなく、ルーティン化した業務をひたすら単独でこなす日々であった。本来やりたかった組織作りに関わる機会は1度もなく、パソコンに向かい、与えられた仕事を行う毎日。それに加えて、目に見えて自分の成果を実感することがなかなか難しい業務内容であったことから仕事をする上での目的が不明確となってしまう、結果的にやりがいをも失ってしまった。

しかし、改めて考えてみると当初の理想とのギャップからこの職業にやりがいを見出せなかったのではなく、自分自身が何事に対しても無意識のうちに固定概念を抱いてしまったことが今回の根本的な原因なのではないかと推測する。例えば、私は人と関わる機会は当然会社が提供してくれるものだと思い込んでおり、自ら他の人とコミュニケーションを構築しようとしなかった。不安なことがあってもよほどでない限り、分からないことは恥ずかしいことと決めつけ素直に聞くことが出来なかった。また、この仕事におけるやりがいはどんなことかと疑問が浮かんだ際にも周囲の人に聞かないままやりがいを特に感じない職業なのだろうと自己完結させてしまった。そもそも自分のやりがいは「人と関わること」のみであると最初から限定的に考えてしまっていたために、そうでない業務であった途端に自分とはマッチしていない職場であると思い込んでしまった。

このようにどれも自分次第で変わったかもしれない反省点ばかりな点から、私には自発性が欠如していることに併せて、物事をより広い視野で深く考える力が欠けていることがわかった。自分の価値観や考え方のみに囚われ、新たな選択肢や可能性を失ってしまうことはとても勿体ないことである。今後は物事を一旦疑ってみたり、複数の視点から捉えてみたりと何事も俯瞰的に考える習慣を身につけることで双方の改善に繋げていきたい。

最後に、日常生活においても言語化能力の不足や知識量の乏しさなど明確な能力は即座に改善点として認識することが出来るが、今回の弱みに関しては実際にインターンシップに参加した経験をこの授業で繰り返し行ってきた深く考えるという行為のもと、振り返りをしたために気づけたものであると感じる。これらの経験を決して無駄にせず、これからのキャリア形成に活かしていきたい。

働くことと自分について知る

2年 奥村 侑生

私は今年の夏から今にかけてマーケティング支援事業や採用支援コンサルティング事業を行う会社でインターンシップを行っています。主な仕事内容は、“これから世の中で話題になるサービス”をリリースする企業のプロモーションを自治体や学校に向けて行うことです。私はこれらの仕事内容をいわゆる“テレアポ”といった形で行いました。私がインターンシップを行う目的は、将来やりたいことが決まっていない今の自分に対してビジネススキルや企業についての知識を得ること、自己分析することです。この活動は実際に大人の方と電話越しに話す機会があることや、そもそも企業のサービスについて知らなければ受け答えができない内容の為、自然に企業についての知識がつくようになることから自分の目的に合ったインターンシップであるといえました。

インターンシップの活動で学んだことは大きく分けて二つあります。一つ目は“対応力”についてです。基本的に会社で用意されているトークスクリプトをもとに電話でのアポイントをとることを実施するのですが、よく先方から予期せぬ質問を問われることがあります。架電して初めてそのような機会に自分が陥った時に、突然すぎて対応できませんでした。というのも、自分は昔から物事に対して直感的に行動するといった節があり事前に調べることや慎重に行動するという面では乏しかったとその時反省しました。ここで、自分は今まで直感的に動きすぎた、で終わるのではなくこれからどうしていくかを考えました。対応力は才能ではなく、先方からの質問の予測やその質問に対する答えを考えたり企業自体について理解を深めておいたりといった、事前の準備によって補えるということです。これらの一連の努力は対応力に比例すると考えたと同時に、自分が社会にでて社会人として働いたときにも会社の即戦力となるには必要な能力であると感じました。またそれとは逆にその行動を以前の自分のように横着して怠ると一生対応力は培われなれないと思いました。

二つ目は“仕事において目標をたてることの大切さ”です。正確にはこれは私がタイムリーに感じていることです。正直、いまの自分は他のインターン生と比べて仕事にそれほどのめり込めていないというか、仕事自体にやりがいや楽しさを生み出せていないと感じています。出勤してその日自分がプロモーションする企業のサービスと架電するリストを確認して作業のようにテレアポを個人で淡々と実施していくのが退屈を感じる時もありました。そこで他の楽しそうに仕事をこなしている人たちと自分の相違点を考えたところ目標の有無でした。今日はアポ何件とる、何件架電する、どういう話し方を工夫するといった具体的な目標を掲げそれを実践するためのPDCAサイクルがしっかりとできている人が、やりがいや達成感を感じる人の特徴であると気づきました。この仕事は自分に向いていないなど、それ以前に、まずは仕事に向き合い自身の目標を立てることでやりがいを感じるのが仕事にのめり込む方法であると他のインターン生から学びました。

二つの観点からどちらも自主性を前提とした行いであり、これからこのインターンを継続する上でも社会に出る上でも心得ておくべきことであり、また次に繋げていくべきだと感じました。

責任と実行力を鍛える

2年 赤峰 沙都

私は、9月から saas 事業を展開する会社のマーケティングの部署で長期インターンシップに参加しています。業務内容は、SNS の運用企画、記事のライティング、市場調査などです。

このインターンを通して私は大事な二つのことを学びました。

まず一つ目は、働くことに対する認識が甘かったことです。過去にもインターンをしていましたが、そこでは多くのインターンの学生がいたため自分 1 人で行う作業はほとんどありませんでした。今振り返ると、その分一人当たりの“責任の重さ”もあまりなかったように感じます。しかし、今のインターン先では、そもそもインターン生が私ひとりしかいません。そのため仕事を任されることがあると全て 1 人でやらなくてははいけません。そこで初めて、今までの自分の考えが甘かったと認識し、自分の行動や働くということの責任の重大さを理解しました。働く上で当たり前のことですが、そのことに今気づくことができ、本当に良かったと感じます。

二つ目は、自分で考えて行動する力が付いたことです。1人で業務を任されるからこそ、どのような順序でやれば効率が良いのだろうか、他にもっといい方法はないかなど自分で考えながらインターンに参加することができました。入社したての頃に、“学生なのだからやりたいことになんでも挑戦すれば良い”と社員の方が言ってくださりました。なんでもやっていいと自由を与えられましたが、これといってやりたいことが思いつかず、社員の方の指示に従って動くだけでした。しかし、こんなチャンスを与えてもらっているのに、自分のやりたいことをやらないのは勿体無いと思い自分からライティングやその分析の業務をやりたいと伝え、実際にその業務に挑戦することができました。その中で、社員の方に私の得意なことを見つけてもらい、新たな業務を任されるようになりました。

しかし、やりたいことが増え次々に実行に移したがゆえに、自分のキャパシティの限界に近づき期限ギリギリで業務を行うことが増えました。この状態では丁寧な仕事とは呼べないと自分自身で感じました。自分のキャパシティを理解できていなかったことが今回のインターンでの反省点です。これは、自己分析ができていなかったため発生したことであると思います。

責任と、自分で考え実行する力、この二つのことに気づきどちらも最大限の力でインターンに臨んだからこそ、さまざまなことを学び吸収できていると思います。企業の中で働くことで、これから社会の一員として働くにあたり、どんなことが求められているのか何をすべきなのか考える良い経験になりました。働くことに対する認識の甘さや指示待ちで実行力がないこと、自分についての理解が足りなかったことなど自分の改善すべき点に大学 2 年生のこのタイミングでインターンを経験したことで気付くことができ、良かったです。今回気付いた点を本当の自分の力として身につけるために、これからは特に意識して行動したいです。このインターンの経験を活かしてこれからの学校生活と、社会人に向けての準備をより良いものにしたいです。

就活への意識

2年 山本 真聖

私は夏休みの5日間で、金融・不動産コンサルティング企業へインターンシップに行った。主な仕事内容としては、会議室の清掃、来客対応、郵便物の仕分け、簡単なエクセルの打ち込み作業、コンサルティングに関する事柄についての学習・課題等があげられる。

インターン前は、自分についてあまり理解しておらず、自分の強みや弱みも深くわからないのに加え、自分が将来就職したい興味がある業界も見いだせずにしたため、自分をしっかり見つめなおすとともに、仕事場の雰囲気を感じ、就職に対してプラスに働かせたいという思いでインターンに臨んだ。

このインターンシップを経験して、自分に足りていないことが大量に見つかった。主に3点である。1つ目にPCスキルである。単純なエクセルの打ち込みで戸惑ってしまうことが多々あった。2つ目に、知識のなさがあげられる。特にPL、BSの入力作業で、簿記の知識があると間違いや数字のおかしさにすぐ気づくことができた。3つ目に、言葉遣いがあげられる。特に社外の方と話す際に甘い言葉遣いが出ると、会社全体のイメージダウンに繋がってしまうだろう。

この3点について、今後どうしていけばよいかを考える。1つ目PCスキルについては、PCにたくさん触れ、情報処理の授業を積極的に受講することがあげられる。2つ目の簿記の知識については、単純に勉強するということが必要であろう。3つ目の言葉遣いに関しては、普段の接客アルバイトでさらに丁寧な言葉遣いを心掛け、時間をかけて言葉遣いを自分のものにしていくことが必要である。

非常に簡単ではあるが、具体的な対策としてはこのようなことがあげられた。しかし、このような問題がたくさん出てきてしまう根本的な原因は何であろうか。私の中のその問いの答えは、「就活に対する意識」であると考えた。なぜ今までPCスキルや簿記の勉強をしていなかったかと言えば、今はまだ大学生になったばかりで、就活や社会人として働くのはまだまだ先であるという甘えた考え故のものであり、今更言葉遣いのような初歩的なことに気づいたのも、インターンのような社会人に向けた経験を全くしてこなかったからであり、その原因はやはり自分自身の就活や社会人になることへの意識の欠如である。

したがって、この意識の欠如を変えていくためには、普段から就活について真摯に考えていくこと、普段から就活の情報に触れていくことが重要であると感じた。具体的には、1日1回、マイナビなどの就活サイトを見る時間を作ろうと思い、実践しているところである。それに加え、普段から知り合いの就活生に就活の話をついてもいる。また、今までは「まだ2年生だから大丈夫」という考えであったが、「2年生だからやらなくては」という意識に変え、就活イベントや説明会にも、積極的に参加していきたいと感じた。このように根本的な自らの就活への意識を変え、毎日就活について触れ、考えていくことで、もうすぐ社会人になるという自覚を持つことができるであろうと考える。そしてこのような自覚を持つことができれば、飛躍的に充実した就活を行うことができ、それはまた充実した社会人生活につながっていくであろうと考える。

自己認識の再認識

2年 恒川 望

私は、マーケティングコンサルティングを中核としたビジネスを展開している広告代理店で、5日間のインターンシップを行った。業務内容はSNSを使った広報活動で、私は主にクライアントのTwitterとコミュニティサイトの運用を任された。Twitterの運用では、コミュニティサイトに訪れるような導線の役割を担うツイートができるよう意識した。過去一ヶ月分のツイートアクティビティ、インプレッション数、エンゲージメント数、エンゲージメント率を分析し、運用レポートを作成した後にクライアントとのミーティングにも参加した。他にも、ホームページの改善を行いたい新規顧客とのミーティングにも参加し、実際に仕事を獲得する現場を見ることができた。

私がこのインターンで感じたことは、主に2つある。1つ目は、客観的にデータを分析し、新規顧客層の獲得を狙う施策を立てることだ。分析の仕事を任された時点では、過去のデータを見ることや分析ソフトを使って数字の変化を読み取ることができれば思いつくだろうと簡単に考えていた。しかし、数字では変化がある投稿と平均的な数字の投稿を比べても、なぜ変化が起きているかがわからなかった。ここで私が感じたのは、目標設定に対するアプローチの難しさである。新たな施策を考えるという目標に対して狭い視野で考えてしまっていた。社員の方に質問行ったら、投稿の季節性などを考えてみたら良いと言われた。自分はそのままで思いつくことがなく数字と睨めっこをしている状況であった。このことから、多角的な視点を持つことが重要であり、アプローチの手段の引き出しを持つこと、数字にとらわれない柔軟性が必要だということ学んだ。

2つ目は、自分の強みと弱みの再認識である。自分の強みは経験がない分野に挑戦する行動力であると考えていた。しかし、インターンシップを通じて気付いたのは、経験がないことに取り組むだけでなく、それに対する知識を積極的に習得する必要があるということだ。私は熱意を持ち、行動することによってなんとかするという甘い考えを持っていたが、知識が不足していることが、進展を妨げる原因となった。したがって、知識と行動力は互いに補完しあうものであり、経験がない新しい分野に挑戦する前に、十分な知識を習得し、その知識を行動に結びつけることが、成功への近道であるということがわかった。

このインターンシップを通じて得た考えは将来のキャリアにおいて貴重なものになった。客観的なデータ分析や知識の重要性について学び、多角的な視点と柔軟性の必要性を認識した。また、自己の強みと弱みを再評価し、経験がない分野に挑戦するだけでなく、前もって知識を獲得し、それを実践に結びつけることの重要性を理解した。これらの経験をこれからのインターンや就活、学生生活に活かしていきたい。

言語化能力とリーダーシップ

2年 小川 莉菜

私はこの夏、人材育成とマーケティング事業を行っている企業で、約 2 カ月間インターンシップを行った。このインターンシップでは学生 4 人で「Z 世代の若者のキャリアについての価値観」のアンケート調査をとり、レポートとしてまとめ、インターンを行った企業のプロジェクトの資料の 1 つとして活用していただくという業務内容を行った。

私は社会人になった時の働き方としてチームに属して働くことは 1 人で活動するよりも様々な意見交換が可能で、より精度の高い成果を生み出すことができると考えている為、何らかの組織に属して働きたいと考えている。また、チームで働く際に重要となるリーダーシップはリーダーだけが発揮する能力ではない。そこで、このインターンシップを通して「自分なりのリーダーシップの在り方を見つけ、自分の武器として確立する」事を目標としていた。本来私の理想的なリーダーシップの形は常に周りの人・働く環境の事が見えていて、さりげなく仲間を鼓舞でき、思いやりの言動が取れるリーダーであるが、今回の活動で周りを巻き込んでモチベーションを上げる働きかけができなかった。インターンシップは学生 4 人が主体的に調査内容を話し合って決定・実施し、週に 1 度企業様とミーティングを行ってフィードバックを受けて軌道修正するという内容で行ったが、学生同士のミーティング時に「何について話し合うべきなのか」という段階で躓く場面が多くみられた。その時に私自身が「現状・問題・課題」を明確にし、端的に言語化でき、計画・目標を導き出せれば、周りを巻き込んで動機を鼓舞する事が可能であったと思うが、それができなかったのは自分の課題として、「話を端的にまとめて言語化するのが苦手」な事が原因であると気づかされた。また、自身の課題を無意識的に自覚しているので自分の能力に自信が持てず、ネガティブ思考になってしまう課題も見つかった。自信の無さは、他のメンバーがはっきりとした言い方で提案してきた際に、自分で疑問・不安に感じても、流されてしまう問題も引き起こす。今回の活動の始めに不安に感じても自信の無さから発言を躊躇してしまい、他の意見に流され、報連相を怠り企業様に注意を受けた事があった。自分が一瞬でも不安に感じたなら、1 つの意見としてチームのメンバーに伝えて企業様に一旦確認をすれば、そのミスを防ぐ事ができたと思う。

この先、私の「自信の無さ」という課題を克服するには、「現状・問題・課題を明確にし、端的に言語化できる能力」を身につける必要がある。自分なりに現状を分析し、1 つの意見として端的に意思表示できるようになれば、意見に根拠も付き、自身の考えを躊躇する事なく伝えられ、メンバーとの意見交換が円滑になる。具体的には、話し合う議題について疑問に感じた事を深ぼる、解決策や話し合うべき内容を把握する癖をつける事で鍛えていこうと思う。上手くメンバーと交流する経験が増えると、自信もつくだろう。この先の多くの場面で上記の事を意識し、社会人になる前に言語化する能力を向上させ、自信を持って活動できるようになりたいと思う。

人とのかかわり方

2年 鈴木 柚香子

私は、希望する業界が決まっていなかったため、面接時に役立つよう採用担当コースがある会社に応募した。しかし、人数の多いサークルに入っていることを理由に、学生プロジェクトコースに配属された。内容は、会社のバイト探しアプリを、サークル団体や社会貢献をしている学生団体と契約を結び、登録者に応じて協賛金を渡すというものである。

このインターンを始める前に、私は目標を立てた。「自分のビジネススキルアップ」「就職する前に会社という場所の雰囲気確かめる」だった。

初めての会社は想像していたより、堅苦しく、居心地の悪い空間であった。この理由は、上司の存在にあった。これまでの大人たちは、私たち学生に興味を示してくれていたが、会社は全く興味を示してくれなかった。この出来事から、「どうせ短期間」「自分の就職する場所じゃないから」「インターン生なんて期待されていない」など沢山考えてしまうようになり、上司のみならず職場の人たちと関わりを持たなくなった。昼休みは、社員と話したくないためなるべく休憩を取らず距離を自分からとっていた。その結果、シフトがある日は毎回憂鬱で、仕事でも早く時間がすぎないだろうかと考えていた。しかし、最近同じプロジェクトコースに新しいインターン生が入った。その方は本当に気さくで、壁を作る私にも話しかけてくれた。それから、仕事内容の相談もできるようになり、今までよりずっと仕事のがびのびとできるようになった。そして、会社に行くことも苦ではなくなった。

このことから、社員との良好な関係は、自分の仕事のモチベーション・効率において、きわめて重要な項目であることが判明した。しかし、今の私には上司との良好な関係を築く力がないため、実際会社に入ったときも、怖がらずに良好な関係を持つために、これを課題とし、解決策を考えなければならない。

私が考えた解決策は、二つある。一つ目は、組織の仕事は一人ではできないという考えに変えることである。今の私は、仕事なら一人でできると思っているせいか、社員との関係に壁を作っている。インターンをするにあたって考えた目標の「自分のビジネススキルアップ」「就職する前に会社という場所の雰囲気確かめる」は、どちらも一人で完結してしまうものである。しかし、実際に自分を理解している人や相談する人がいない環境は非常に居心地が悪く、出勤する気も起きないし、仕事でも集中力が切れていた。これは「自分のビジネススキルアップ」に大きく影響を与えていると思う。目標を達成するには、まず自分の中にある意識から変えていかなければならない。二つ目は、社員に対して勝手な認識をしないことだ。新しいインターン生に対して、怖いことを理由に壁を作っていたが、話してみると自分が想像していた人という意味で全く違った。話したことの無い社員に対して、「怖い」「私のこと嫌っているのだろう」と勝手に思わないことが大切である。実際に話してみないとその人のことは知れないため、ネガティブに決めつけてしまう癖を直したら、気軽に社員と話せるようになると思った。社会人になるまでに、以上のことを意識して、一人前の社会人になりたいと思う。

未熟な自分と価値観の変化

2年 三好 陸斗

私は7月からの約3か月間、人材コンサルティング・マーケティングを行っている企業でインターンシップを行い、「大学生の職業観・キャリア観に関する調査」という課題に取り組んだ。具体的には、学生4人で1グループとなり、大学生203名に対しGoogle Formでのアンケート調査の実施、その内12名にインタビュー調査を行い、それらデータを元にレポート化し、企業様へプレゼンするといったことを行った。また週に1度、企業様とミーティングがあり、進捗報告や疑問点などを共有しながら課題に取り組んだ他、ウェルビーイングに関するワークも行っていった。

このインターンシップを通して実感したことというのが「自分は未熟である」という点だ。それを実感した出来事というのが、企業様との連絡を行わずにアンケートを実施してしまったということだ。学生4人の話し合いでは、「早くやる分には問題ないでしょう」という結論にまとめ実行してしまったのだが、企業様から「協議し合意形成をしながら進めていくことがインターンシップでは重要であり、この件を看過することは出来ない。今後、信頼関係のもとインターンシップを進めていくために、報告・相談無く実施してしまった経緯を説明してほしい。」との連絡があった。この時を改めて思い返すと、「学生のみで完結し報告・相談を行わなかった」という現状が存在し、その背景にある課題というのが「学生気分だけでインターンシップに参加していた」と整理することが出来、理想は「社会人として業務に取り組んでいく」ということになる。そしてキャリア体験学習の前期で報告・連絡・相談など組織で働くうえで重要なことについて学んだにも関わらず、それを実践することが出来ず、この現状・課題が生じてしまったのは、非常に問題であり、また、自分の未熟な部分であり迅速に解決しなければならないことだと思う。そこで私がやらなければならないことというのが、「より細かな目標設定とPDCAサイクルを行う」ということだ。これも授業の前半で学んだことではあるが、この解決策に取り組むことで、学生生活の中でも明確に責任感を感じることが出来、学生気分からの脱却が図れると考えた。また、これはインターンシップ後に「まず、すぐに」自分が出来ることである為有効な策であり、これを積極的に意識して残りの学生生活を過ごしていこうと思った。

自分の未熟さに気づくだけでなく、インターンシップに取り組んだことで変わった価値観もある。それが「頑張る→凝る」へと変化したことだ。ウェルビーイングに関するワークの中に、これから困難な時代を迎える中で「好きこそものの上手なれ」を意識してキャリアを形成することで、仕事を「頑張る」のではなく「凝る」という風に変化し、努力を娯楽化させることが出来ると学んだ。前期の授業では「お金を重視するか「好きなこと」を重視するか」という議論が行われたが、この価値観変化により私がキャリアに対して求めている物は「好きなこと」であると気づくことが出来た。

“働く” ことに何を求めるのか

2年 日向 美咲

私はこの夏、主にタレントスカウトや、所属タレントのマネジメントを行っている企業へ、インターンに行った。ここで私が感じた課題は、仕事をしている中で、何のためにこの仕事しているのだろうかという思考に至ってしまい、仕事への意欲が低下してしまうということである。なぜこのようなことが起こってしまったのか。この原因究明と、今後このようなことを起こさないために、今の自分に何ができるのかを考える。

まず、原因として考えられるものは、自分自身が仕事に何を求めるのかを自分が一番分かっていなかったということである。私自身、インターンを始める前に仕事に対して何を求めているかと考えると、「やりがい」や「楽しさ」であった。楽しくなければ仕事は続けられないし、やりがいを感じられなければ、仕事をしていても長く続かないと思っていた。しかしそれは違った。私が一番仕事に求めるものは、「お金」だった。この会社は時給制ではなく、完全成果報酬型であったため、自分が何も成果を出せなければ、一銭ももらえなかった。それを分かっていたながらも、マネージャーの仕事に元々興味があったため、「楽しい」を求めてこの仕事を試みようと思った。ただ、お金がもらえる保証がない状態で仕事をしていると、途中でなぜか「この仕事をやってもお金がもらえとは限らない」という思考が出てきてしまう。そして、今このインターンをしている時間がすごく無駄だと感じ、仕事に対する意欲が低下し、結果も出せず、報酬も出ないという負のサイクルを一生回ってしまっていた。しかし、この感情をアルバイトの時に感じたことはない。それは、アルバイトは働けば働いた分だけ確実にお金がもらえるという保証があるからであると考えた。しかし、自分は決して怠けて楽をしてお金を稼ぎたいとは思っていない。ではなぜこの感情が生まれてしまうのか。それは、自分が本当に全力で頑張っても、「報酬」という目に見える結果で評価されないからだと考える。実際このインターン中にも、私は1日で100件近くDMを送り、マネジメントにおいても、担当しているタレントがどうしたらさらに有名になることができるのかを必死に考え、行動していた。当時は自分のできる限界であったと感じる。しかし、目に見える結果としては全く評価されない結果におわった。自分の努力が足りないと言われればそうなのかもしれないが、少しも目に見える形で評価されないことが、自分の仕事に対するモチベーションを下げることに繋がり、結果として、このインターンを長く続けることができなかつたと考える。

では、このようなことが今後起きないようにするために、今の自分には何ができるのか。それは、自己分析を徹底して行うことである。今回は自己分析を全くできていなかったことがこのような結果を招いたと考える。そのため、他の時給制のインターンに参加して自分が興味のない仕事でも、お金の保証があれば、本当に働けるのかを知ることが必要である。それが分かれば、自分自身が将来どのような企業に就職したいのかを見つけることができるようになるのではないかと考える。

問い続ける重要性

2年 神山 尚輝

私は7月の下旬から10月の中旬まで、人材コンサルティング・マーケティングを行なっている企業で約2ヶ月半のインターンシップを行なった。インターンシップの内容は、現役の大学生約200人にキャリア観に関するアンケートを取り、その結果を分析しレポート化と発表を行うというものであった。

今回のインターンシップの経験の中で気付いたこととして、私には論理的思考力が不足していると感じた。大学生から収集したアンケートの結果を分析するとき、このような結果になった要因は何であるのかという問いに対して、深い考察ができていなかった。その結果、分析結果をまとめたレポートの内容が満足いくものにはならなかった。なぜ、論理的思考をすることができなかったのかについて考えると、私は何か物事を考えるときには、仮説を立ててその仮説が成立するような情報だけを見る癖があることに気づいた。例えば、大学の授業でレポート課題を出された時のことである。私は、レポートを書く際に、仮説を立ててその仮説に辿り着くような都合の良い情報しか集められていなかった。今回のインターンシップでも大学生のキャリア観は何なのかについて仮説を立てて、その仮説が成立するような情報だけを集めてしまったことが原因で、根拠が薄い結論になってしまった。

次に、なぜ仮説が成立するような情報しか集めない癖がついてしまっているのかという理由について考えた。それは、最低限の情報を集めるだけの方が試行錯誤をせずに効率的に情報収集ができ、すぐに結論を出せると考えていたからである。つまり、物事を楽に処理したいという考えがあったということである。私は考える時間を最小限にして、結論を出したいと考えてしまっていた。学生は社会的に見れば未熟であるため、立てた仮説は基本的に外れることが多いと思う。そのため、何回も試行錯誤をすることが大切である。言葉にすると当たり前のこととして気が付くはずであるが、私は普段から無意識的に試行錯誤をすることから逃げていた。今回のインターンシップを通して、今まで自分が行っていたやり方では、仕事においてうまくいかないことが多いことに気づくことができた。

試行錯誤をしながら深い考察のある分析を行うためには、自分の出した仮説に対してなぜそのように言えるのか、根拠は何かを繰り返し問う必要があると思う。繰り返し問うことによって物事を多角的な視点から見ることができ、情報を集めるときに仮説を無理やり成立させるような方向に進んでしまっても、方向を修正することができる。普段からなぜそう言えるのかという思考を繰り返し自分自身に問うことによって、今回のインターンシップで自分に足りないと感じた論理的思考力を補うことができると考える。

今回のインターンシップを通して、私はまだ社会人に必要な能力が十分に備わっておらず、自分に対する能力の認識の甘さを痛感した。そして、今回のインターンシップで自分に最も足りていない部分は論理的思考力であるということに気づくことができた。今後は、このインターンシップの経験を活かすため、卒業するまでに自分の弱点を少しずつ克服して、社会人として当たり前の基準を満たせるように努力しようと考えている。

思考を止めない力

2年 中村 朋滝

私は、8月15日に起業したAIを利用したサポートを行うコンサルティング会社で現在に至るまで、インターンをしている。主な業務は、ニーズ分析、営業リスト作成、テレアポ、営業、AI利用サポート、コンサルティング補佐であり、興味があったコンサルティング会社のスタートアップに立ち会うことができた。このインターンを通した気付きは大きく分けて2つある。

一つ目は、自分の「思考の浅さ」である。私は自分がなれないことをやる時、まずは言われた通りに行いやりなれた後に、やっと自分で考え「自分のやりやすいようにアレンジをする」というのが私のやり方であった。しかし、スタートアップ企業でこのやり方は太刀打ちすらできなかった。上司が与えている情報は最低限のやり方だけであり、どこにニーズが発生するのかなど自分が業績を積むために必要なものは自分で情報を集め集積し結果につなげる、そのサイクルに終わりなどない。周りの社会人が当たり前に行うことを私は当たり前でできていなかったのだ。私の思考段階は行動に裏付けなどなく、こうだったらいいだろうと気まぐれにやり、その結果運よく結果がついてきていただけだと知らしめられた。これを執筆している今でもこれが胸をはって出来ているとは正直言えない。しかし、その作業を当たり前に行うということを知れたこの経験は私にとって大きな契機になった。

二つ目に、自分の「誠実さ」を表す態度である。私はこの経験をする前の自己評価として他の人よりは第一印象のよい態度、しゃべり方、話の運び方が出来ると思っていた。しかし、実際営業で自分のありのままで行くと上手くいくことはとても少なかった。私は「下手」だったのだ。この行動を改善するために、しゃべるという行動に焦点をあて自分の行動分析を行った。すべての事柄は分析することができると学んだと同時に、抑揚やトーン、共感することなど多くの課題が表面化した。表面化したところで自分に馴染んだものはそう簡単には治らない。意識してもそうそうに元に戻ってしまう。自分が自信をもっていたコミュニケーション能力は自分のテリトリー内での話であり、テリトリー外ではありふれたものだったのだ。正直なところかなりショックを受けた。自信があったものが崩れていく感覚はなれないものであり、逃げようかと思った。だが、結果は出したいし出さなければならないのだ。この経験を通して私は自分という人と初めて向き合ったように思える。なんとなくできていたことが細分化され分析されそして多くの欠点を見出した。この欠点は、いまでも完全に治っているとは思わない。ただ、自分を理解し改善点を意識できるようになったのは、大きな学びとなった。

私はインターンを通して、多くの挫折を経験した。そしてすべての行動原理は分析することができ、裏付けをすることが可能だということを知った。改善には時間がかかる。だから考え続けなければならない。幸いまだ時間はあるのだ。この時間を大いに使い、自分という人となりを目指とする自分に近づけるように残りの学校生活を歩んでいこうと思う。

Ⅱ. 成果報告（体験エッセイ集）

2) 水谷クラス

インターンシップ先・実施期間一覧（水谷クラス）

	氏 名	インターンシップ先（業界等）	実施期間
1	大角 咲季	ゼネコン	5 日間
2	宮地 建吾	監査法人	5 日間
3	菅野 ひな	ゼネコン	5 日間
4	岡田 桃佳	健康アプリ開発会社	9 日間
5	三木 冴斗	法律事務所	5 日間
6	牧野 光希	自動車部品製造業	5 日間
7	金谷 優帆	メンテナンス業	5 日間
8	志村 萌々華	ゼネコン	5 日間
9	下村 響	法律事務所	5 日間
10	渡邊 愛美	IT	5 日間
11	伊藤 優詩	映像制作会社	5 日間
12	山川 琴子	ゼネコン	5 日間
13	青木 優果	映像制作会社	5 日間
14	太田 天	監査法人	5 日間
15	渡辺 陸	メンテナンス業	5 日間
16	鎌野 蒼馬	IT	5 日間
17	柴田 歩武	ゼネコン	10 日間
18	川崎 颯太	監査法人	5 日間
19	山本 知寛	静岡県地方自治体	5 日間
20	茅根 菜々美	保育園	5 日間
21	堀田 ちひろ	メンテナンス業	5 日間

企業に対するイメージの変化

2年 大角 咲季

私は準大手ゼネコンの五日間のインターンシップに参加した。五日間の業務として、一日目は会社概要や人事、広報、総務の部署の説明、二日目は建築部、設計部、設備部などの部署の説明と、中野二丁目地区再開発の現場見学に行き、三日目は横浜湘南道路トンネル工事の現場見学、四日目はアセットバリューアッド事業部、地域環境ソリューション事業部など、その会社独自の部署の説明、五日目はインターンシップのまとめと発表という流れで行った。

私は将来やりたいことや進みたい業種が決まっていなかったため、大学二年生という今、将来の職業選びの選択肢を増やすことを目的として幅広い業種を見てみるのが重要だと考えていた。そこで今回、ゼネコンのインターンシップに参加することに決めた。建設業というと、建物の建設やインフラの整備などの専門的な知識が必要である職業だというイメージがあり、「何かを作る・生み出す」以外にどのような仕事があるのかを知らなかったため、これを機に建設業界やゼネコンについて理解を深めたいと思い、準大手ゼネコンの会社を選択した。

五日間のインターンシップを終えた自分自身の変化として大きいのは、やはり建設業界についてのイメージの変化である。建設業というと、先ほども述べたように建物や土木などの工事関係の仕事が大半だと思っていたが、実際は地域の再開発をしたり、ホテルの企画や運営といった不動産のような仕事をしたり、環境について考えて様々な取り組みをする部署があったりと、「ものづくり」をもっと広い視点で見たような仕事も多く存在した。工事現場に見学に行った際は、普段は絶対に見ることができないような、地下でトンネルを掘削している現場を見せていただき、そのスケールの大きさに圧倒された。工事現場の関係者の方々は、「この仕事は非常にやりがいがあり、トンネルが完成して道路として開通したときはこのトンネル工事に自分が携わったことを家族に自慢している」とおっしゃっていた。そのようなお話を聞いて、やりがいを感じる仕事というのは大きな達成感が得られ、仕事に対する意欲の向上にもつながるため、仕事を選ぶ際に欠かせない要素であると再認識できた。

今回参加したインターンシップで建設業やゼネコンに対するイメージが変わったように、実際に体感しないと知らない世界があったり、その業界に対して勝手に抱いている先入観があったりするため、表面だけを見て自分が興味のある業界だけに限定してしまうのは、自分の好奇心や能力の可能性に蓋をしまっていることになる。そうではなく、その時点ではあまり興味がない業種でも一度調べてみたり体験したりすることで、その業種についての理解が深まり職業選びの選択肢が広がるので、幅広い業種に触れてみるというのは非常に大切なことだと改めて感じた。また業種によっても給料や福利厚生が違い、それぞれ特徴があるため、自分が企業を選ぶ際に重要視したいことを早いうちから把握することも、充実した業界研究をするうえで大切なことだと改めて確認できた。

監査の世界に触れて

2年 宮地 建吾

今回自分がキャリア体験学習のインターンで就業体験をさせていただいたのは都内の大手会計事務所でした。会計事務所とは、主に他の企業をクライアントとして、その財務状況や内部統制などを実際に現場に出向いたり、銀行の情報と照らし合わせたりして調査し、資料にまとめ、株主などに提示するなどして安全性の太鼓判を押すという業界で、公認会計士という医師、弁護士に次ぐ三番目の難関資格が必要な特殊な会社です。実際に参加した実習は、会計士を目指して勉強しながらその雑務や周辺業務を補佐するような部署にお邪魔させていただき、そこで来年度の内定者の方々と一緒に業務を簡略化したワークショップを5日間に渡って体験させて頂きました。

大学に入る前も入ってからいつも心の何処かにあった“就職”という強迫観念から目を背けていましたが、その意識を今回のインターンは大きく変えてくれました。初日から4日目までは監査法人・業界の概要説明、架空の会社の財務状況などの資料を利用して、エクセルを利用して整理したり書類を作成したりする実務体験をさせていただいたり、実際に取引先などに送るメールの手順やテンプレートなどを体験させていただきました。操作自体は難解なものは少なく感じましたが、他の参加者と違い会計の勉強をしていなかった自分にとって監査や会計の世界を体験することは新鮮な体験でした。最終日には、実際に現場で使われている更に進んだ監査のツールやシステムについての話がありました。

正確に企業の状況を把握しなくてはならない監査といえども、企業が持っている大量の情報、資源、資産を一円単位で見るとはできないので、優先順位をつけ、見るところを限定していき効率的かつ効果を失わないような監査業務を目指していました。このような手法を取っているため、監査をパスして市場に安全だと提示されていた会社も東芝事件やオリンパス事件のように不正会計があとから発覚することもあります。その対策として前年と異常な乖離がある数字や過去の不正会計のデータなどをAIで分析することなどが挙げられており、監査業務にもAIやIT化の波を感じました。

最終日には公認会計士として実際の現場で働く方々と一つのテーブルを囲んでランチ会を開催していただきました。たった5日間のインターンでしたが、実際に日本の経済を引っ張っていく最前線を間近に見せていただき、そこで働く人々との対話の機会を与えていただきました。長い間自分の中に答えを探して堂々巡りしていましたが、そのスケールの大きさと遭遇することで視野を大きく広げてくれたように感じます。今後、自分が監査の業界に進むかは全くわかりませんが、他では得ることのできないこの大局観を大切にしていきたいと感じました。

自分にとっての働く意味を発見

2年 菅野 ひな

私は今回、準大手ゼネコンのインターンシップに9月4日から9月8日の5日間参加しました。1日目から3日目までは首都圏支店、4日目と5日目は本社でお話を伺ったり、実際に仕事をしたりしました。実際に幕張の現場に行き建設途中の建物を見学したり、事務作業（支払いの資料作成や公共料金の確認）を行ったり、経営企画部の方と分析をしたりして「働く」ことに対するイメージを掴める良い機会でした。また、ダイバーシティ推進部というものがあり、私たちの学部にも関連しているので興味深い内容でした。

私はこの貴重な経験を通して、自分にとっての仕事とはどのような役割を果たすものなのか、自分は仕事に対して何を求めているのかを認識できました。職業を選ぶにあたってお給料が良いこと、やりがいを感じられること、得意なこと、休みが取りやすいこと、など優先順位は人それぞれだと思います。そんな中で私にとって大切なのは、「仕事」と「プライベート」をしっかりと分けて考えられる事と職場の人間関係や雰囲気が良いことだと認識できました。会社の方とお話をしてみると、私と年齢の近い方は比較的同じ考えの方が多く、自分のプライベートを充実させるための手段として仕事を考えていました。その点で今回インターンシップに参加した会社は定時で帰りやすい雰囲気だったり、休みが取りやすいようだったり、ワークライフバランスがとりやすいような印象で、雰囲気や制度はこんな会社で働けたら理想だなと思いました。

社会に対する意識の変化としては、どんなことでも自分が知らないところで誰かが働いていることを日々実感するようになりした。今回は建設系の会社だったので、街の建物を見て自分の家に帰ったときに、一体どれだけの人が関わって、どれだけの時間がかかったのだろうかと考えようになりました。きっと今私がエッセイを書くのに使用しているパソコンもつくり、届けて、販売するのに何人もの人が働いて、そのおかげで私の手に届いているのだと思います。私は今まで飲食店（接客）でしかバイトをしたことがないので、表に見えている部分しか知りませんでした。見えないところで沢山の人が働いている社会の凄さを実感しました。このように社会が回っているのならば、小さいことのように感じる仕事もきっと誰かの役に立っているのだと思えるようになりました。

そして職場の方のお話やこの経験を通して一番感じたのは、大学を卒業してから定年まで週5で働き続ける（結婚した場合の出産などのライフイベントを除く）と考えたときに、仕事は人生の大部分を占めることを改めて認識しました。自分の性格を考慮した場合、仕事以外に熱中できることを見つけたとしても仕事に大きなやりがい、または楽しさを見つけないとどれだけお金があっても途中で「終わりが見えない中、何のために働き続けるのか」と毎日苦しくなってしまうと思いました。そのため、今自分に必要なことは、仕事に結びつくような興味のあることを増やすことだと思いました。大学生のうちに色々な方のお話を聞いたり、語学の勉強を試してみたりして、自分に合うものを探したいです。

仕事に対する熱意と計画の重要性

2年 岡田 桃佳

私は、都内にある健康アプリ開発会社へ対面・オンライン含め、9日間インターンシップに行かせていただきました。内容としては、初日に全体のミーティングに参加させてもらい自己紹介を行った後、担当の方から、会社の概要や、各部署(チーム)の説明を受けました。2日目からは、グーグルスプレッドシートのスケジュール表をもとに、チームの担当者の方からの指示を受け、各チームの作業を手伝わせていただきました。

実際にインターンシップに参加し、一番感じたことは、社員の方々の熱意でした。会社での、ある営業チームのミーティングに参加させてもらった際には、会議自体は、オンラインとの併合であったものの、それぞれの意見を多く出し合いながら、会議が行われていました。今後の道筋を立てていく中で、時には、意見が衝突したり、食い違いがある場面もあつたりとイメージしていた会議とは違い、少し驚きが多かったのですが、それぞれの考えを傾聴しながら理解し、お互いの意見を取り入れて行っていました。これは、会社全体が掲げる目標と、それぞれのチームが担っている役割が明確になっているからこそ成り立っていることだと感じました。最近ではアプリを使った事業を行う会社がとても増えている中で、ユーザーの目に留まり、継続して利用してもらえるようなアプリを作っていくために、社員の方々は常に考え、先を見ているのだなと間近で感じることができました。他社の健康アプリ開発に関して、他社が行っているキャンペーンを分析するための資料を作成した際には、ただ単に他社が行っているものを並べるだけでなく、自分たちの会社に活かせる部分はどこなのか、どの部分がユーザーに響いていて、どれくらいの継続力があつたのかなど、様々な分析する観点があることを学びました。

また、9日間の作業で、今後の自分には、もっとスキルが必要だということを学びました。実際に社員の方々と作業をしていく中で、「計画性」と「スキル」の重要性に圧倒された場面が多かったです。各チームの連携をとるためにも、どこのチームも作業の目標設定を常に全員が把握し、仕事に取り組んでいることや、毎週1回定期的に行う全体会議で、進捗状況をそれぞれが説明することは、日々活動自体を成長させていくことに必要なのだということを学びました。この計画性については、自分自身が普段から学生生活だけでなく、私生活もきちんと計画を立てて、実行しているので今後も継続させ、自分の力を高めていこうと考えています。そしてもちろんアプリを開発するためには、専門の技術が必要であり、そのためのスキルを今からすぐに身に付けることは難しいかもしれないけれど、今からでも獲得できるスキルは多くあると考えます。どの企業にも、通じていくと考えるパソコンに関するスキルや、自分の興味分野である、健康や、他者支援、心理学に関する資格などを調べるのが重要だと考えます。そして、それを自分の力にしていく事で、将来の働く自分を考えた時に、新たな視野が広がる可能性につなげていきたいと思っています。

インターンシップの学びと気づき

2年 三木 冨斗

私は都内の法律事務所で5日間のインターンシップに参加しました。初日に事務所説明、弁護士の仕事説明をしてもらい、2日目からは課題とその講評を中心に活動し、各日の終わりに部署ごとの座談会を計画してくださり、たくさんの方々とお話する機会をいただきました。そのほかにも、事務所でDX化の取り組みについて説明していただきました。弁護士会・裁判所見学、弁護士の先生方とのランチなど貴重な経験することができました。

ロースクール生でもなく、法律に詳しいわけでもないため本当の弁護士の仕事を体験したわけではありません。しかし、それ以外の視点で法律事務所に参加して学んだことが大きく分けて二つありました。1つ目に感じたことは、チームワーク・コミュニケーション力の大切さです。弁護士はクライアントの依頼に対して過去の事例を参考にしたり、法律書や過去の判例を見聞きしたりして、解決に導く個人的作業が中心である印象がありました。しかし、実際は一概にそうではなく、頻繁に会話がなされていました。例えば、似たような事例があった場合には、経験豊富な先生や、より専門的で詳しい先生に相談していました。今回参加した法律事務所の特徴として、部署ごとの仕切りがありませんでした。事務や広報の席を囲む形で弁護士の先生の席が配置されていました。これによって、弁護士の先生方が事務方に書類作成を頼みやすく、事務所が一つのチームなって活動しているといった印象を受けました。

2つ目に一人一人が責任感を持って仕事に臨んでいるということです。弁護士という職業上、クライアント情報を第三者に開示してはいけないといったことをはじめ、継続的な学習という点からも感じました。インターンシップに参加した時期にちょうどAI等を用いた契約書関連業務支援サービスと弁護士法にかかわる声明が法務省から発表されました。こうしたルールや法改正によって弁護士は継続的な学習を通じて専門知識を更新し続けなければいけないという点から責任感を感じました。更に、クライアントとは基本的には個人が対応し、限られた時間の中で効率的な時間管理が求められているということを、真横にいる先生方からみて実感しました。

今回、弁護士のもとでインターンシップを行い、法曹界の内部を垣間見るとともに、社会の仕組みを実際に体験する機会を得ることができました。新しい世界に触れて、毎日が新鮮で楽しい体験でした。元々弁護士という職業には関心がなかったのですが、インターンシップを通して、その職業の魅力を新たに発見しました。それと同時に社会に出て働くことの厳しさや自分に足りないことを見つけることができました。専門的な知識がないと何もできないことや何も理解できないことの悔しさや仕事の責任感を今回のインターンシップで気づけてよかったです。今回の経験を生かして新たな選択肢を広げ、これからのキャリアの参考にしたいと思います。

社会の厳しさを感じた五日間

2年 牧野 光希

私は埼玉県の製造業の自動車部品会社をインターン先として選びました。そこで5日間のインターンで様々な経験をしました。初日、まず管理部の方に挨拶をしました。その時から社会人の経験がない自分はどの様な挨拶、礼儀が正しいかわからなかったのととても緊張しました。挨拶を終え、まず会社の説明を受けて工場見学を行いました。初めて生のオフィスを見た感想としては静かにパソコンに長時間向き合う姿に社会人としての当たり前を感じました。工場見学をした際は初日、経理部の方で写真に収めてある名刺を電子のフォーマットに名前や会社名、メールアドレスなどを打ち込み、簡易的に見ることができるようになる作業を行いました。このような一見地味に見えるような作業の一つ一つが会社を支えているのだと感じ、また自分が些細なことでも会社の役に立っているような実感をえました。しかし普段黙々と作業することになれてない自分は集中力が続かず作業が滞った時もありました。社会人の集中力に感心しました。

2日目は社長とお話する機会を頂きました。まず、自分は髪色が明るい状態でのインターンを許可して頂き、そのことについて話しました。髪色が明るいのも個性なのかもしれないが、何も形としての成果や実績を残してない自分に対してそれを個性として扱ってくれる周りの人はいないという少々厳しい言葉を頂きました。しかし、その話の中で自分のこれからのキャリア形成の甘い部分が見えた気がして自分のやりたいことに忠実に生きたい、と思えるようになりました。社長は自分のやりたいこと、将来の目標について真剣に話を聞いて下さり、今思えば上場企業の社長から鋭い視野でのアドバイスをいただくことが出来てとても充実した時間だったと思いました。

3日目の午後には管理部の方と銀行の方との話し合いのオブザーバーとして出席しました。社会人の方たちの真剣な話し合いに出席しました。大きな金額が動く会社間での取引の緊張感にはおどろきました。会社の先の未来をしっかりと考えながらの取引は大変だろうけど社会人としての達成感の要因の一つになると感じました。

4日目は検品作業の続きを行いました。同じ作業の繰り返しでしたが、一日でも自分の作業スピードが速くなっていることに気づきました。こうした小さな自分の変化を感じることができることが働くことにおいて重要だと思いました。

5日目は名刺を電子化する作業の続きを行いました。一つの会社でたくさんの人とかかわっていることが一つ一つの名刺からわかりました。会社で働く人の中にはたくさんの役割があり、その一つ一つが会社を支えているということがわかりました。自分が感じたことは、会社の上に立つ人たちがどのような思いで会社を動かしているかを感じやすい会社に勤めたいと感じました。まさにこの会社では実際に社長とお話しさせていただき、そのような会社だと感じました。このように学生では体験できないような緊張感を感じながら社会人の厳しさを体感できるいい機会になりました。

未来に生きるメンテナンス業

2年 金谷 優帆

私は、東京都にあるメンテナンス業の会社に5日間対面形式でインターンシップに行きました。初日はガイダンスや会社の概要説明が行われました。2日目以降は、実際に現場に行き、施設の見学や科学技術を学び、電気工作やエネルギー管理体験をしました。他には大手空調工事会社のイノベーションセンターに行き、空調設備の役割や歴史を学び、普段は見られない空調設備を身近に感じる事が出来ました。最終日には会社の先輩方のお話を聞き、先輩方と一緒に昼食を食べたり雑談をしたりといった交流をしました。

私は、このインターンを通して初めてメンテナンス業がどのような業種なのか、どのようなことをするのかを知りました。このインターンシップには私以外、ほとんどが理系の学生だったので、普段は関わる事のない方たちと交流ができて非常に貴重な経験になりました。理系の方が主にどのようなことを学んでいるのかを知り、私が普段学んでいることとは全く違い驚きました。このような授業の一環としてインターンシップに行くという機会がなければ、メンテナンス業のインターンシップに行くことはなかったと思うので、社会には様々な職業があるのだなと視野が広がりました。

特に驚いたことは夏の蒸し暑い気候の中、ヘルメットと長袖のブルゾンを着て暑いボイラー室で作業をしている人たちがいるということです。そのような方たちがいないと私たちは一年中快適に過ごせないことは分かっていましたが、実際に作業の場を見せていただいたことでそのことを改めて実感しました。設備管理とは商業ビル・学校・病院などの建物の電気、空調、衛生や防災などの設備を維持・管理することで、私たちが日常を過ごすうえで欠かせない職業です。実際にこの会社は法政大学やサンリオピューロランド、ホテルオークラなど身近な建物から有名な建物まで幅広く扱っていました。しかし、近年では少子高齢化や建設技術者・技能者の減少で人材不足という問題が発生しているそうです。この問題を解決するために建物を新しく建てるのではなく、今ある建物を活かすリニューアル・メンテナンスの方向に移行しているとのことでした。人材不足の理由として私は、そもそもメンテナンス業のことを知らない人もたくさんいるのではないかと思いました。

私が参加したメンテナンス業の会社では新入社員の育成プログラムや教育施設が充実していて、非常に魅力的だなと思いました。そのなかでも私は自分がいつか結婚して子どもを産むことを考えると、福利厚生が手厚いことにとても魅力的に感じました。そして先輩たちが社会人生活を充実させるために大切なことを教えてくれました。まずは生活習慣を整えること、先輩や上司とのコミュニケーションをとること、何事も目標を持ってやること、平日はしっかり働いて休日は自分の好きなことをすることが大事だとおっしゃっていました。実際に職場を体験したり、会社の人の話を聞いたりして貴重な経験になりました。まずは自分の興味・関心のあることを模索していきたいと思います。

大人の背中を見て学んだこと

2年 志村 萌々華

私は9月11日から15日までの5日間、東京都に本社を構える準大手ゼネコン企業でインターンシップを行った。全5日間のうち、3日間は本社で会社の部署説明を受け、残りの2日間は土木と建築の現場見学を行った。最終日にはインターンシップでお世話になった社員の方々に向けて「インターンシップで学んだこと」というテーマでプレゼンテーションを行った。

今回のインターンシップを通して、大きく2つのことを学び、その学びから自身の成長を感じることができた。1つ目の学びは「仕事は社会貢献につながる」という点だ。ゼネコン企業は「建物を建てること」を行う会社である。建物は人々が生活する上で必要不可欠であり、ライフラインを整えるための基盤ともなる。また、土木事業で行われるトンネルや高速道路の建設も多くの人々の役に立ち、新たな交通手段ができることによりスムーズな移動につながり、国民の生活の質の向上につながる。企業に勤め、働くということは、1人では成し遂げることのできない社会貢献を、会社という大きな規模で、同じ志を持った仲間とチームワークを築き上げ、達成できる魅力があるということを学んだ。

2つ目は「自主的に行動できる人こそが社会に求められる人材である」という点だ。インターンシップの中で多くの部署の方々にお話を伺う機会があったが、その中で私はいろいろな人の意見を聞くために、お話をしてくださったすべての人に共通して、「社会に求められる人材とはどのような人だと思いますか？」という質問をした。その中で「コミュニケーション能力がある人」や「もともとスキルがある人」といった意見がある中で、1番多かった回答として、「自主的に仕事ができる人」という人物像が挙げられた。仕事を行う上で、疑問に思ったことを自分で調べてみたり、「わからない」ということを恥ずかしがらずにしっかりと意思表示し、上司や専門の人に頼ったりすることが働く上で大切であり、そのようなことができる人材こそがAIが発達する上で求められている人材であるということ学んだ。

5日間という短い期間ではあったが、多くの大人と関わり、社会人と同じ時間に出退勤をし、社会との関わりを持ったことで自身の成長を実感することができた。今回のインターンシップは、「2年生だから～、なんとかなるから～」といったように、どこか甘えていた自分自身を律するきっかけとなった。好きなことを仕事にし、より輝かしい大人になるためには、就職活動を始める際に選択肢を1つでも多く増やせるように資格の勉強に励むことや、大学生でしかできない貴重な時間を使った経験をたくさんするべきであると考えた。

社会に出て働くということにネガティブな印象を持つ大学生が増えている世の中ではあるが、今回のインターンシップで輝かしく仕事に励む社員の方々の背中を見て、これからキャリアを築いていくことがとても楽しみになった5日間だった。

法律事務所でのインターンは新たな自分を見つけられた

2年 下村 響

私は8月14日から18日まで都内の法律事務所でインターンシップに参加した。1日目のガイダンス、最終日の裁判所見学を除き、1日を通して課題に取り組むというようなインターンだった。3日間の課題はそれぞれテーマが異なったもので、「法律事務所の人口、経営管理」「地域の子育て支援」「司法サポートによる企画」など多角的な視点から司法に基づいたキャリアデザインの課題に取り組んだ。

これらの課題によって気づいたことは、弁護士は裁判での活躍がメインだというイメージであったが、そのようなイメージでは思い浮かばないような多方面での活動があった。「司法サポートによる企画」での課題でこうした気づきが多かった。例えば、「マッチングアプリにおける売春防止のためのアカウント管理で法律に基づいたアドバイスを行なっていく」、「景観法に基づく建築規制から自由が効かないデザインを、弁護士によるアドバイスによってサポートする。よって以前よりも自由がきいた建築ができる。」などだ。こうした企画は弁護士による司法サポートの実例に基づき考案した。これらから弁護士サポートの幅広さを感じ、さまざまな業界での活動に気づけた。

その他インターンでの気づきは、事務所のアットホームな雰囲気がイメージとは違っていた点だ。一般的に、弁護士とは司法と関係が強い職業であるため堅苦しいイメージがある。しかしそんなイメージとは全く違って、あたたかい職場で業務が行われていた。複数弁護士で構成されている事務所であるため、弁護士同士での事例の考え方の違い、また過去の経験を踏まえたアドバイスなどさまざまな会話が聞こえてきた。個人での業務遂行がメインであり、弁護士間での会話は少ないというイメージだったが、そのようなイメージとは逆だった。こうした環境であったことで、課題にも取り組みやすく、質問の機会を設けていただいた時も主体的に質問することができたと感じる。

医療法務チームの弁護士の方々とお話をさせていただいた際、医療法務が自分たちの身近にあるものに関係していることがわかり、そうしたことから弁護士の仕事が自分たちとかけ離れたものではないと感じた。今回のインターンのような研修以外では、エンタメ上でしか見る機会のない程、実際に関わることが稀な機会であったからこそ、身近にあることに気づけなかった。こうした気づきは他の職業にも言えることだと考えるため、身近なことにどんな人々が関係しているかに注目する視点をこれから大事にしたいと感じた。

新たな着眼点というテーマで今回のインターンに取り組んだが、以上のようにさまざまな新しい気づきがあった。今まで踏み込んでこなかったものにこのようなテーマで取り組んだことで、自分にはないものをうまく吸収できたと感じる。3年になりインターンの機会が増えてくるため、インターンごとに自分の中でテーマを決めて、新たな自分を見つけられるきっかけにしていきたいと考えた。

信頼を得るコミュニケーションスキル

2年 渡邊 愛美

私はIT企業に5日間インターンシップに行きました。そこでは、社会のマナーや会社のルール、営業の仕事内容を教えていただきました。一般の大学3年生が受けている営業とSEのインターンシップに参加してもらい、お客様に商品を提案する流れなどを1から学びました。5日間の実習中に得たことを含め、自社の採用ターゲットを考え最終日には社員の方々の前でプレゼンを行いました。

私が今回のインターンシップを通して感じたことはコミュニケーション・対人スキルが社会において最も必要であるということです。実際に営業の体験をした時には人事部の方がお客様役となっていたのですが、初めに信頼を得てお客様の情報を聞き出すというのがとても大変でした。自社の紹介、お客様の情報収集が信頼関係を築く鍵になると知り、相手とうまく会話をし、コミュニケーションをとれるかが、どの仕事をするにしても重要であると感じました。また、相手の立場になって考えるのがどういうことかあまり理解できていませんでした。しかし、この商品を購入し利用すればどのような利益やメリット・デメリットがあるかを伝えたいという商品の提案がお客様のことを考えての対応なのだと考えました。今回は会社に出社する機会が2回あったのですが、会社の雰囲気についても自分のイメージの中での変化がありました。私は会社内の上司との関係に不安を抱いていました。雰囲気が想像よりも穏やかで上司とよくコミュニケーションをとっている印象を受けました。上司との関係性は会社内の連携に結びついていると感じた経験でした。

一般の大学3年生と一緒に受けた営業とSEのインターンシップ(2日間)では6人ほどのグループを組み、そこでお客様にどの商品を提供するか、戦略方法などを話し合いました。オンライン上でのインターンシップだったため、会話がしづらく相手の表情も読み取りづらい状況での作業でした。今回は発言回数が少なく満足のものではなかったのですが、自分に何が足りなかったのかが明確になったと感じました。一つ目は資料の読み取りです。企業の難しい資料を素早く理解し、どう活用していくかを考えるスキルがとても重要だと感じたため、より多くの企業のホームページを見て情報収集のコツをつかむべきだと思いました。二つ目は会話の入り方です。意見を言うのが一番大切ですが、その前段階で相槌を打つことを意識しようと思いました。相槌は話を聞いているという表れになり、相手の安心感につながります。同意の意見を述べるきっかけにもなりうると感じました。三つ目はメモを取ることです。特に今回強く感じたのは、グループの人が言った意見をしっかりと理解してからメモをするということです。ただ意見だけ書いてもその意見が誰のものだったのかわからないと話を広げられないと感じました。この三つを普段の生活や授業で意識して来年から本格的に始まる就活につなげていきたいです。

映像制作を通して現場の大切さを実感

2年 伊藤 優詩

私は今回のインターンシップ体験で映像制作会社に行きました。その会社は主に競馬放送を取り扱っていました。インターンシップの内容としては全5日間で、映像制作、企画部門の見学が2日間、番組のナレーションを録るのが1日、最後に技術部門の見学を2日間行いました。映像制作の方では収録する番組の前日準備から参加したのですが、ほとんど自分ができる仕事はなく、唯一行ったのは収録の時に演者さんが見るカンペ作りでした。その日は主に番組のテロップや収録中に差し込む映像の編集をしていました。次の日は収録当日で、演者さんの楽屋の準備、収録スタジオの準備、さらには収録中のスタジオの中に入れていただき収録を見学させていただきました。ナレーション録りの日は見学に終始していました。最後の技術部門では週末に行われている競馬中継の前日準備や当日の仕事内容を見学させていただきました。前日準備の際には、音声さんや音響さん、スイッチャーさんなどのお話もたくさん聞くことができました。中継当日はたくさんの画面の前で仕事をしている姿を見せていただき、さらにはご好意で音声やスイッチャー、さらにはカメラの仕事も体験させていただきました。

競馬については、アルバイト先の社員の人が熱中してやっているのでもどのようなものかはなんとなくは知っていましたが、自分自身は競馬をしたことが無く、興味もなかったので自分の感じたことのないことが学べそうと楽しみでした。実際に行ってみるととても奥が深く関わる人一人一人がとても強いこだわりを持っていました。特にこだわりを感じたのは、番組で差し込む静止画を作っている際、自分はもう完成していると思っていた画を少しの色味を変えていたところでした。素人目にはあまり変わらないんじゃないかと思っていたのですが、いざ変更した画を見せてもらったら何倍も変更した方が見やすかったです。さらにナレーション録りの時も声優さんがいらしていたのですが、細かいイントネーションの違いや、言葉使いなどを変更し何テイクもとっている姿はとてまかつよく見えました。

今回のインターンシップで感じたことは、気になったことはたくさん聞くべきだと言うことです。インターンシップ中何回かなんか気になったことある？や質問とかある？と聞いてくださったのですが、自分はいま聞くことができずにいました。しかし見学をしていると働いている人全員、自分が気になったことは他の人に聞いていました。例えば前の段落で揚げた静止画の際も編集担当の人が気になったのかディレクターの人に相談しながら編集していたり、ナレーション録りの時も何人もの人が収録の現場にいて、1人の人が気になったイントネーションや言葉遣いを相談しあっていたりしていました。この些細な相談を通じて突き詰めていくことでより良くなっていくのだと感じました。これはどの職業でも自分は大事だと感じたのでこのインターンシップでこの感覚に触れたのは非常に良い機会だったと考えます。

社会に出て働くということ

2年 山川 琴子

私は準大手ゼネコン会社で5日間のインターンシップに参加しました。そこでは主に各部署の説明を聞き実際に業務を体験したり、ロンドンとzoomを繋いで海外投資家の方と会議をしている様子を間近で見たり、現場に足を運んで建設中の建物の内部を見学したりしました。

まず、5日間のインターンシップを終えた率直な感想として「楽しかった」と言いたいです。インターンシップをする前の私は、早起きをすることや8時間という労働時間の長さ、さらには体験する業務を上手くこなせるか、などといった部分に不安を感じていました。しかし、そのような心配は一切不要でした。社員の皆さんにたくさん話しかけていただき、こちらの質問にも丁寧に回答していただき、その気配りや優しさが5日間の何よりの支えとなりました。また、このインターンシップを通して学んだことや感じたことが大きく3つありました。

1つ目は、建設業に対する理解の深まりです。それまでの私は、“建設”と聞くとどうしても工事や設計がメインのように考えてしまっていました。しかし、業務の体験を通して、実際に工事をしている現場の外でたくさんの部署がそれぞれの役割を果たし、そこにいる人たちが輪のように連携して1つの建物をつくり上げているのだということを、身をもって実感することができました。

2つ目は、建設業界で活躍されている女性が多いということです。少し前の時代まで、建設業は男性社会であるという風潮があったと言います。私も同じように考えていました。しかし、実際の社内には多くの女性社員の方々がいました。私の体感では男女比は半々くらいだったのではないかと思います。女性社員の皆さんはテキパキと且つ楽しそうに業務をこなしていて自分が将来なりたいと思う姿そのものでした。

3つ目は、働くということの責任の大きさです。アルバイトでは多少のミスは社員さんや先輩にカバーしてもらえたり、そもそも重大な仕事を任せられることが少なかったりしますが、会社では自分のやることがそのまま利益や経営に影響を及ぼしてしまうのだということを学びました。

そして、このインターンシップ中に社員の皆さんの働いている姿をたくさん見てきたからこそ、改めて自分自身と向き合うことができました。自分はどのような職種に就きたいと思うのか、何をモチベーションに仕事をしたいのか、働くうえで大事にしたいことは何か、これらのことを考えて、ぼんやりとですが自分なりに答えを持つことができました。この5日間は本当に有意義で貴重な時間だったと確信しています。ここで吸収したことをしっかり自分のものにし、就職活動のみならず今後の自分のキャリアにも役立てていきたいです。

テレビという世界の凄さ

2年 青木 優果

私は8月に5日間、競馬番組を制作している東京都のテレビ制作会社にインターンシップを体験しにいった。テレビ番組を制作するにあたって大きく分けて制作部と技術部の2つがあるのだが、1日目と2日目は制作部の見学、3日目と4日目は技術部の見学、5日目はMAと呼ばれる番組制作における最後の段階の見学をした。

1日目は、アシスタントディレクターという役職の方の仕事の見学や体験をした。仕事内容は主に翌日行われる「競馬バラエティー番組」の台本を見て、収録本番でMCとゲストに見せるカンペを作ったり、ディレクターが行った台本の修正をプロデューサーに確認を取りにいき、許可をもらったり、完成した台本を翌日関わる全ての人数分のコピーをした。まず1日目にインターンシップを体験してみて感じたことは、会社の人々はみんな競馬愛に溢れていて、会社の雰囲気は明るく、なごやかで楽しそうで、この仕事に誇りを持っていることである。そして、1日目で学んだ事は、カンペをとにかく見やすく作る事が大事だということである。これはテレビ業界ならでは、収録中にタレントのミスを防ぐために大きく目立つように作っているのである。

2日目は、「競馬バラエティー番組」の収録の見学をした。この番組には自分がよく知っている芸人の方が出演していたので感動した。この日もアシスタントディレクターの方について回っていたのだが、この日は収録で使うスタジオを組み立てたり、タレントの方が使う楽屋を整備したり、差し入れのお菓子をカゴいっぱい詰めたりした。この日学んだ事は、テレビ業界では「時間」がとにかく大事で、テレビ局内にある時計は電波時計ではなく、全てコンセントを差し取り込むデジタル時計で統一されていることである。これは一秒たりとも時間のズレを許さずに収録や生放送を行うためである。

3日目は、技術部の見学をした。技術部の中には、ディレクターやタイムキーパー、VTR、静止画、音声、SE、カメラ、スイッチャーがある。この役職を全て見学した。この日学んだ事は、テレビ制作と言ったらADなど制作部の方を思い描いていたので、技術部がこんなにもたくさんの役職があるということに驚いた。

4日目は、中央競馬パドックの生中継を見学した。この日学んだ事は、急に馬が出られなくなったとか騎手が交代したなどという情報を焦らずにみんなで共有し、事実確認を行って生中継をこなしていることである。

5日目は、MAの見学をした。MAとは編集済みの映像にセリフやナレーション、BGMや効果音などを加え、音質やバランスを調整し、音の最終仕上げを行うことである。この日学んだことは、ナレーション原稿をみんなですべてチェックし間違っているところをすぐに訂正するということである。

私はこの5日間を体験して、興味があったテレビ業界という世界でインターンシップをしなければわからない臨場感を体験することができ、テレビ業界で働くという凄さを知ることができた。

スキルの掛け合わせと今後の展望

2年 太田 天

私は大手監査法人のインターンに5日間参加しました。1日目は監査法人・業界の概要説明やパワーポイント、エクセルの使い方などのビジネススキルを取得しました。2日目はビジネスメールのルールやマナーなどを学びました。そして会計監査手続の概要説明を受けました。3日目は実際にExcelなどを用いて監査手続を実施しました。この日は特に現預金についての監査手続を実施しました。4日目は純資産、内部統制についての監査手続を3日目と同様Excelなどを駆使して実施しました。5日目は次世代監査の取り組みの説明を受け、最後に課題の発表等を行いました。

私が今回のインターンで感じたことは、なにか一つの強みだけでは社会において必要な人材とはなり得ないという事です。私は現在公認会計士試験のための勉強に励んでおり、他のインターン生よりも会計についての知識が多少ある状態で今回の実習に望みました。しかし、実際仕事現場の最前線で活躍されている方々と話してみると自分の知識がいかに不完全なもので、曖昧なものなのかを思い知りました。それだけでなく活躍されている方たち、特にパートナーの方は会計の知識だけでなく英語、マネジメントのスキルなども持ち合わせていました。実際に現場で活躍されている方は自分の得意分野を一つだけでなく複数持ち合わせているなど感じました。さらに、3日目、4日目に行った監査手続の実習では使用するExcel上のデータはほとんどが英語により表記されており、会計の知識がある人でも英語の知識がないと仕事をしていくうえではかなり大変だと思いました。こうしたことが今回のインターンで感じたことです。公認会計士の論文試験に合格しても実務で使えるまでに会計の知識を育て上げる必要があり、会計だけでなく英語やExcel、PowerPointなどのビジネススキルを身につけ、自分の得意分野をさらに広げて行かなければならないと思いました。

私が考えていた理想の人生設計プランは早めにストックオプションなどで儲けて早期に引退することでしたが、第一線で活躍されている方々を見ているとこのようにいきいきと楽しく働いて世間に貢献して仕事をしていきたいと強く思うようになりました。いずれにしても人一倍努力をし、誰にでも必要と思われるような人材になるスキルや知識が必要になってきます。社会人になってからOJTなどで一から知識を身につけていたのではとても遅いと考えます。もちろん会社特有の手続やビジネスにおけるマナーなどの社会人になってからしかわからないようなことはOJTなどで身につけていけばいいとは思いますが、仕事で必要になってくる最低限の知識などは時間が豊富にある学生時代に学んでおいたほうが良いと思いました。大学受験のための勉強と資格取得の勉強の決定的な違いはその知識をそのまま仕事に活用できるかどうかです。私はこの学生期間中に今後の人生で一生使っていきような知識を身に付けたいと思います。

設備管理会社を通して学んだ、視野の幅を広げる重要性

2年 渡辺 陸

私は設備管理会社に5日間のインターンシップに参加しました。そこでの内容は主に、どういう事業を行なっている会社であるのかという説明、営業所や事業所に出向く現場研修などです。設備管理というニッチな業界であったため、5日間かけて設備管理とは何か、作業内容は何か、どういう会社であるのかを丁寧に教えてもらいました。現場研修では実際に空調などを設備管理しているシステムや作業を見学することができました。またそれだけでなく、どの現場も有名企業の施設であり、企業の内部を見学するだけでなく、その企業そのものの説明もしてもらえました。

まず設備管理会社のインターンシップで感じたことは、ニッチな業界なのに意外とニーズがある業界で規模感も大きいということです。設備管理というのはエアコンや空調機、発電機、遠隔空調システムなどがあり、これらを常に管理し、時間帯によって温度調節などを行います。それだけでなく、故障や異常がないかなども管理(点検)のうちに入ってきます。この会社では主に企業の設備管理を行っており、それだけ機材やシステムの規模も大きくなっていくため、技術者や専門職の人が必要となってきます。建物ストックの増加とともに仕事は増える一方なので、ニーズがあることを知りました。また、今の時代、「使い捨て」という考え方よりも、「良いものを長く使う」というのが主流になっているため、「設備管理」はこれからもっと需要が高まっていくのではないのかと感じました。

このインターンを通して、他企業の説明も受けることができたので、キャリアの視野が広がっただけでなく、自分の興味やキャリアプランについての考えが深まりました。インターンやアルバイトなど、大学生ならではの経験を通して、社会人になったら誰も助けてくれないということを強く感じました。そのため、インターンに行っただけで満足せず、本当に興味があるのは何かについて熟考し、社会人になる前準備をしっかりと行っていきたいと思います。そのため、他にも興味がある業界や企業のインターンやイベントには積極的に参加し、自分のやりたいことを模索していきたいと思います。

またインターンだけでなく、この授業の講義、グループワークを通して、私は人と話すことや話しながら何かすることが好きだということを知りました。将来はそういった人との関わりが多い仕事をしていきたいと考えています。その分、自分の意見や考えを話す場面は必然的に増えるため、相手に物事をわかりやすく伝える言語能力を磨いていきたいと思います。そのためには相手の意見や考えを傾聴し、良い部分をたくさん吸収して、自分の考えを常にアップデートしていくことを今後の目標に据えようと思います。

最後に、この授業を履修して、自分とはどういう人間なのか深く考えさせられました。自分の悪い所は他人と比べてしまう所ですが、自分の内面を考え、言語化し、行動する、を繰り返していくうちに、それも大して気にならなくなりました。上手く言えませんが、とりあえずカッコいい人間になりたいと思いました。もうあと何年後かには社会人になるため、成長実感と決断経験を得られるように前述の目標に取り組み、責任感のある人間になれるよう精進していこうと思います。

学生と社会人の意識の差

2年 鎌野 蒼馬

私は、9月4日から9月8日までの5日間、主にシステムインテグレーション事業とサービス・サポート事業を行う企業のインターンシップに参加しました。体験した業務内容は大きく分けて2つあり、1つ目はオンラインでの一般の営業とSEの営業体験、2つ目は新卒の採用ターゲットを考え、企業に提案するというものです。このエッセイでは、5日間で私が感じたことや考えたことについて述べることを目的とします。

この5日間を通して私自身にとって一番身になったことは「社会人としての生活」というのを経験することができたということです。元々、社会人は毎朝早く起きて満員電車に乗ってご飯を食べる時間もなく残業をするものだと考えていました。しかし、想像していたよりもゆったりでみんなでランチをし平和だなと感じました。もちろん、体験するだけなので仕事量は少ないし時間にも余裕があるようなスケジュールにさせていただいたのはわかりますが、社会人の動きを知ることができて、今後の就職活動時の企業選びの要素の一つとして参考になったので良かったです。そして、社会人は生活サイクルが忙しくしんどいと感じていましたが、必ずしもそうではないということを感じることができて心構えが多少楽になりました。

また、学生と社会人の違いを、採用ターゲットを提案するという課題から学びました。それと同時に、社会に対する意識の変化を感じました。この課題はプレゼンテーションによる提案という形だったので、パワーポイントでの資料作りが必要であり、短期間で完成させるのに苦労しました。その際、担当者の方に何よりも間に合わせる事が大切と何回も言われました。学生は課題を提出しなくても成績が付くだけでなく何らかの処置が施されますが、社会人はそうはいきません。最悪間に合わなかったりクオリティが低くなったりしてもいいだろうと考えていた学生の私にとって社会を甘く考えていたと痛感しました。

このように、課題というものに対してモチベーションや意識の違いが圧倒的に学生と社会人の間にはあるなと感じました。また、生活サイクルの部分では想像していたよりもゆったりとしていたのに対して課題の部分では厳しさを体験し、現実を見せつけられました。

これらの経験を通して自分自身に必要なことは、私の考える社会人像をはっきりとさせ、近いうちに社会に出るという意識を確立させ、ギャップを埋めておくことだと考えました。そのためにアルバイト先の社員や知り合いの社会人の話を聞き、実際に社会で生きている人の生の声を聞くことが必要だと考えました。そうすることで自分の想像と現実のすり合わせができるのではないかと思います。

今回のインターンシップを通して入社したり課題に追われたりして、近いうちに社会人になることを改めて鮮明に実感しました。他の大学二年生があまり経験することのできないことを体験できたことを活かして今後の就職活動に役立てていきたいです。

社会人への第一歩

2年 柴田 歩武

私は、埼玉県の地方ゼネコンのインターンシップに10日間参加させていただきました。社員の方の講義や現場見学を通じて、測量や安全対策など、建設に関わること全般を学びました。ただ建設の知識が増えた訳ではなく、働くことに対する考え方・意識の変化もたくさんありました。

インターンシップを通じて一番感じたことは、準備段階の作業が一番大切だということです。最初の2、3日は測量について学んだのですが、内容としてはそこまで難しくなく、作業も地味で、その時は数日かけて学ぶ内容なのかと疑問に思いました。しかし、その後の現場見学にて、作業員の方が「測量が1cmでもずれていたら工事が一からやり直しになる」とおっしゃったのです。この言葉から学んだことは、測量は建設においてピラミッドの土台部分であり、細かく、そして丁寧にやらなければならない作業だということです。何事においても、土台がしっかりしていなければ上手く進むことはなく、そこから成長もできません。準備を怠ることなく取り組むことが一番効率的なやり方なのだと学びました。

社会人の責任の重さも、今回のインターンシップで感じたことの一つです。建設業は、住宅やビルなどの建築物が完成するまでの工程に大きく携わっている分、絶対に設計ミスをしてはいけないという大きな責任が生じます。ある建築物に不備があった場合、困るのは建設業の人びとではなく、実際にその建築物を利用する人々です。これは、どのような仕事においても当てはまることです。人間である以上、どんなに気を付けていても失敗は起きてしまうものです。だからこそ、普段から一つ一つの作業に責任感を感じて仕事に取り組み、なるべくミスを減らすことが大事だと学びました。

最後は、当たり前なことを当たり前にする大切さを学んだことについて述べたいと思います。当たり前なことに何が当てはまるかは定義が難しいですが、ルールや時間を守ること、何かあったら連絡をすることなどが当たり前であることは世間で共通していることだと思います。大学生までは、ルールや時間を守らなくとも困るのは大体自分だけでした。課題の提出期限を守らず成績が悪くなる、友達との約束を破って信頼関係が崩れるといったことがその例です。しかし、いざ社会人になると他人に影響を及ぼすことが格段に多くなります。遅刻をすればその分を誰かがカバーしなければならなくなるし、会社のルールを守れなければ組織内の秩序が乱れて多くの人に迷惑をかけてしまいます。インターンシップ期間中も、実際に働く立場ではないけれども、時間やルールはしっかり守りなさいと教わりました。どのような立場であっても当たり前なことを当たり前にすることの重要性を今まで以上に感じるようになりました。

ここに述べたこと以外にもインターンシップを通じてたくさんのことを学ぶことができました。それらの学びが、立派な社会人になるための第一歩にもなりました。今回は建設に関わる仕事を経験しましたが、建設業以外の仕事も積極的に経験し、今後の財産にしていきたいです。

コミュニケーションスキルの大切さについて

2年 川崎 颯太

私は、8月28日から9月1日の5日間にわたって、大手監査法人のインターンシップを経験した。1日目、2日目は、wordやexcel、power point、ビジネスメールなど最低限のビジネススキルを学んだ。3日目以降は、現金実査や預金データとの照合など、監査法人の業務について架空データを用いて実施した。また、最終日にはpower pointを用いて将来の自分について発表を行った。

今回私が学んだことをまとめると、業界知識、職場経験、コミュニケーションスキル、問題解決力の4つに分けることができる。まず、業界知識に関して、元々会計の勉強をしているので知っている方ではあったが、監査の実務を経験されている方々からお話を聞くことによって、より業界知識を深めることができた。また、監査の勉強をしていても抽象的でありイメージをつけることができなかつたが、監査実務を経験することで、今まで勉強してきた会計処理などを具体的に体感することができた。また、各業界のインターンシップへ行くにあたって、職場経験をスムーズに進めるために、ある程度はその業界の知識をつけておくべきだと感じた。

次に、職場経験に関して、今までもwordやexcel、power pointなどを使用したことはあったが、いかに自分が雑に作成してきたかを思い知らされた気がした。特に、職場の方が説明のために作成したpower pointや来年入社される方のpower pointは非常にわかりやすく簡潔にまとめられており、早いうちから身につけておくべきスキルだと感じた。また、ビジネスメールを通じて敬語や言葉遣い、メールのフォーマットなどを学んだが、身の回りにほとんど同年代の人しかいなかった中高生時代にはなかなか意識して学ぶことができなかったため、非常に役に立った。こういったビジネススキルは職種・業界に関わらず必要であり、どの業界に行っても役に立つスキルだと感じる事ができた。

そして、コミュニケーションスキルに関して、特に会社外との横断的なつながりと会社内の縦のつながりが大事だと感じた。会社外との横断的なつながりは、特にこの業界では相手の会社との情報共有が重要であり、そのためには適切なコミュニケーションを取れる力が大事であるのと同時に、先述したビジネスマナーを身につけるべきであると感じた。会社内の縦のつながりについては、具体的には経験豊富な上司とのつながりを指している。会計士の勉強、インターンシップの経験を通じて、監査は多くの責任を伴い、少しでもミスが起きてしまうと取り返しのつかない事態になる恐れがあることを知り、それを避けるために上司との情報共有は非常に大切なものとなってくることを実感した。わからないことがあれば自分の判断で行うのではなく、まずは上司に相談してみることが大切である。

さらに、問題解決力に関しては、今までは個人で与えられた仕事をこなしていただけだと感じていたが、個人個人が共通の目標に向かって相互に協力しながら問題を解決していくのが仕事なのと思った。今回のインターンシップでは、会計業務を行う際にもグループで問題を解決していく形で進められた。

最後に、この経験ではコミュニケーションの大切さを学べたが、これを将来生かしていかないと意味がないと思うので、自分が社会の一構成要素であるという自覚をもって仕事を行うべきだと感じた。

社会に対する考え方の変化

2年 山本 知寛

私は今回、静岡県地方自治体において5日間のインターン活動に参加しました。1日目は、各部署の説明や業務の概要を学びました。2日目は、インターン先の部署が観光部であるため、演習として静岡空港からの旅行プランを立てるワークを行いました。3日目は、実際に静岡空港を訪れ、空港利用時に妨げとなる要因を調査しました。4日目は、SNSを通じて情報発信する演習を行いました。5日目は、今まで行ってきた演習（静岡空港から他県に行くコース、空港PR）のプレゼンテーションを行いました。アイデアは必ずしも奇をてらう必要はないということ学びました。

春学期の「キャリア体験事前指導」では真剣に自分自身の将来について考えることができました。私自身、この授業を受講した主な理由は、他の授業と比べて自己分析に充てる時間が多いと感じたからです。その結果、グループワークを通じて、自分一人では気づきにくい要素について客観的な意見を受け入れ、さらに細かく分析することができました。また、インターンシップサイトの使い方やインターンとは何か、など全体を学ぶことができる良い機会でした。

私はこのインターン活動を通して、社会に対するイメージを良い方向に変えることができました。私自身、公務員と聞いたとき「堅いイメージ」でしたが、実際には意見交換やグループワークの時間が多かったです。また、公務員のみならず私の中の「社会のイメージ」は社会問題や文化によりミスを許す余裕がなく、常に自分自身のことしか考えていないというイメージでした。しかし、部署全体は優しい雰囲気であり、ミスを許すことができる環境に驚くと同時に、インターン活動を行って良かったと心から思いました。目に見えない無形のモノを県民がどのように感じて評価するのか、広い意味でのマーケティングを学ぶことができました。これから社会に出るにあたって、顧客の視点に立つことが多いと思います。その際に、マーケティングを学んでいる人は、コミュニケーションを円滑に進めることができ、顧客の持っている潜在的なニーズを聞き出すことができると考えます。そのため、今回のインターンシップで行った顧客の視点に立ち旅行プランを立てるワークは、非常に有益なものだと感じました。

課題点としては、3年のインターン生に質問を任せすぎてしまったところです。「何か質問ありますか」といわれた際、3年生が積極的に手を挙げていることに少し焦りを感じました。3年生の方々は言われたことをただ聞くだけでなく、聞きながら「なぜそれが最適なのか」すべてに対して疑問を持ちながら話を聞いていることに驚きを感じました。先輩方を見て当たり前を疑う姿勢を身に付けたいと感じました。また、メンバーの一人がリーダーシップを発揮している状態であったため、私自身もリーダーシップを発揮することのできる機会を自ら作るべきだと感じ後悔しています。

今回のインターンシップで「社会のイメージ」を良い方向に変えることができたのが、一番良かったと感じています。社会に出ることに恐れを感じていましたが、この経験から社会で働くことへのイメージが湧くと同時に、他の自治体（企業）にもインターンをしたいと感じるようになりました。

保育園の重要さと課題点

2年 茅根 菜々美

私は今回、埼玉県川口市にある保育園へ 5 日間インターンシップに行った。この保育園では、園長先生に色々教わりながら、保育園児の 1 日の生活をサポートしていった。園児が登園してきてから一緒に遊んだり、給食の用意を手伝い、食べさせたりした。また、園内に飾る装飾を作る作業も行った。帰りにはその日一日の園児達の変化や気づきをまとめる作業を行った。このインターンシップでは、基本的に、園児に寄り添うということを学んでいき、園児と接するだけではない保育士の仕事も少し覚えた。

私はこの保育園でのインターンシップを終えて、子どもと接することに対する緊張感を覚えた。私の母が保育士のため、普段から話を聞くことが多かった。いつも子ども達のことを楽しそうに話す母を見ていて、保育士は大変だが楽しい仕事だというイメージが強かった。しかし、実際はそんなに簡単なものではなかった。子ども達と接することはすごく楽しかったが、こんなにも何をすることも緊張感があることを初めて実感した。遊ぶ時も、おもちゃで怪我をしないように常に見ながら遊ばなければならないし、食事のときは子ども達が好き嫌いしないように楽しませながら、安全に食事を与えなければならない。お昼寝の時間は、うつ伏せになっていないか、しっかり息をしているかなど確認することが多い。人の子どもの命を預かるということは、どれほど責任感があることなのかということはこの短期間だけでも実感した。私はこの緊張感や責任感を感じて、保育士という仕事は子ども達の将来を背負っているのだと考えた。保育園は幼稚園と違って、親が働いているため、保育園での教育が子どもの将来にとってより大切になってくる。子どもの今だけでなく将来も背負っているということを強く感じた。

私はこのインターンを通して、子どもに対する接し方や意識が変わった。今までは、可愛いから一緒に遊んだり話したりするという感覚でしかなかったけれど、私達の行動ひとつひとつが思っている以上に子どもに影響を与えていることを知った。私は、小さい子に良い影響を与えられるような大人になりたいと考えた。普段はあまり意識しない挨拶のこと、お礼のことなど小さなことでもしっかり手本となれるような人になりたいと思った。また、園長先生の話聞いて、保育園や保育士が不足している点は解決しないといけない問題だと感じた。子どもの成長に必要な不可欠な保育園は全国にも非常に少なく、保育士も足りていないというお話を伺った。この問題を解決するためには、保育士の時給を上げたり、保育関係の学校を活発化させたり、考えられる対策はたくさんある。しかし、どれも簡単にできるわけではなく、難しいからこそ今までなかなか状況が変わってこなかった。私は、インターンシップで今まで焦点を当ててこなかった社会問題にも気づくことができたことは、とても貴重な機会だったと感じた。

自主性と責任をもって働く

2年 堀田 ちひろ

今回、私は空調設備工事分野の最大手企業の子会社で、主要業務が設備管理とメンテナンスである会社で、計5日間のインターンシップに参加した。このインターンシップでは5日間を通して、会社の活動や業界について詳しく学び、座学のセッションを受けたほか、管理部、営業部、技術本部など、さまざまな部署の紹介を受けた。また、関連する施設や事業所を見学し、実際の設備や建物内のシステムを視察した。2日目には電気工作の実習も経験し、3日目には親会社である大手空調設備工事会社の施設を訪れ、最新の設備や機器を見学した。4日目にはエネルギー評価の実習を他の参加学生と共にグループで行い、最終日である5日目にはインターンシップのまとめとして活動報告会が行われ、先輩社員との交流を通じて、入社後の情報や経験を共有してもらおうというのが全体の流れである。

このインターンシップを通して、自分の中で最も学びになったことは、「自主性」と「責任」である。今回インターンシップ先を探すうえで、初めは設備系の会社を対象としていなかったため、未知の分野ということもあり、不安な気持ちを抱えたまま挑んだ。実際に参加して最初に感じたことは、周りの学生と自分とのインターンシップに対する熱量の差であった。彼らは、積極的にその会社に関する情報収集をし、私が考えもしなかった質問を次々と社員の方たちに投げかけていた。私は何を聞いていいのかもわからず、事前の下調べもしていなかった自分の意識の未熟さを痛感した。自分から周りのインターン生と交流したり、積極的に社員に質問したりして、「自主的」に何かを得ようと行動しない限り、成長には繋がらないと学ぶことが出来た。また、このような設備系の業界には、男性や理系の人が多い業界というイメージが強かったが、様々な部署や施設を見学する中で、文系・理系、男女にかかわらず、各々の役割に責任を持ち、真剣に業務に取り組んでいる姿を目の当たりにした。そこで、会社という組織全体の目標に貢献するためには、与えられた仕事に「責任」を持つことが働くうえで非常に重要だと感じた。さらに、この会社では、年々女性の比率が増えていることや、女性が働きやすい場所にするための取り組みに力を入れていることを知り、設備業界の男性中心というイメージが私の中で大きく変わった。このように、女性も活躍できる職場かどうかという点は、就職先を選択するうえで重視していきたいと思った。

最後に、このインターンシップで今まで携わることのなかった業界についての知識と魅力を知ることが出来た。実際の現場で働く様子を見て、社員の声を直接聞くことで、会社についての情報や必要とされるスキルを知り、実際に会社を見ることの意義を身をもって感じた。またグループワークや話し合いを行った際、他の参加学生と意見を交換することで、周囲から刺激を受け、自分に足りない部分や必要なスキルを学ぶことが出来るという面で、自分にとって大きく成長できる良い機会となった。業界も絞らずに、一社のインターンシップを終えただけでも、これだけ多くの気づきがあるということは、まだまだ新たな発見がたくさんあるだろう。様々な業界の会社を調べ、実態を知り、その上で自分に合う会社を絞っていくことがこれからの自分には必要であろう。今回の経験を、今後就職活動をする上での参考にしていきたい。

Ⅱ. 成果報告（体験エッセイ集）

3) 田中クラス

インターンシップ先・実施期間一覧（田中クラス）

	氏名	インターンシップ先	実施期間
1	中川 拓洋	マーケティング	長期
2	野田 圭一郎	製造小売業	長期
3	馬目 直治	マーケティング	2週間
4	山田 莉子	マーケティング（成長産業支援事業）	長期
5	刘 雨娃	マネージャー（芸能）	約10か月
6	関 秀彬	HR サービス営業	約4か月
7	加藤 菜央	HR コンサルタント	約4か月
8	関 夢果	SNS マーケティング	約5か月
9	三宅 結菜	営業	約1か月
10	宮原 命	CS(CX)(専門サービス業)	約6か月
11	岡 碧依	SNS マーケティング	約6か月
13	田中 初花	営業	約1か月

インターンシップでの知見と成長

3年 中川 拓洋

私は交通インフラ業界のスタートアップ企業で、7月から現在（1月）まで、約6ヶ月間の長期インターンを行なっています。主な業務は、TikTok、X、InstagramなどのSNSを含めたオウンドメディアの運用と企画立案です。その中でも、私は記事作成を担当し、新しい企画やアイデアを提案しながら、閲覧数の伸びを追求しています。記事作成と言っても、執筆作業だけでなく、時にはクライアントやアンバサダーの方に取材を行ったり、SNSで記事を拡散投稿したりするなど、様々な業務を手がけます。この経験を通じて培ったスキルと、これからの自分に必要なことについて記述したいと思います。

このインターンを経て、いくつかのスキルを向上させることができました。まず、執筆力と文字で適切に意味を伝える能力が向上しました。記事の作成を通じて、情報を明瞭に伝える技術を磨くと同時に、作成後はデータ分析を行い、エンゲージメントを確認することで、言葉選びや読者の興味を引く方法を学びました。また、SNSのスキルも大きく発展しました。拡散力や影響力の高さから多くの企業がSNSを活用していますが、同時に悪い評判も瞬く間に広がるリスクもあります。企業アカウントの運用においては、統一性を持たせる必要があり、色や文字のフォント、イラストなどに関する細かなルールを守りながら運用することが求められています。これにより、SNSの運用において企業のイメージを構築し、維持するスキルを磨くことができました。

加えて、企業の社会的責任に対する意識が変化しました。東京23区内にも、交通の便が悪いエリアがあることに気づき、鉄道の沿線に大学やショッピングモールがあるように、交通インフラが街の発展に深く関与していることを実感しました。地域の自治体との連携を通じて、地域の活性化に貢献する活動を経験し、企業のミッション実現とビジネスの共存について学びました。具体的なアプローチとして、地域の自治体との連携を通じて、交通ルールや安全講習会を開催し、地域住民や利用者に対して安全な交通の重要性を啓発し、事故やトラブルの予防に寄与しました。このような積極的なアクションにより、地域の安全性向上やコミュニティの発展に寄与しただけでなく、企業のミッションと地域社会との調和を築く手助けになりました。これらの活動や地域との協力を通じて、ビジネスの成長と地域社会の繁栄が共存する良好な状態を築くことの重要性を学び、企業の社会的責任について深く考えるようになりました。

これからの自分に必要なスキルについて考えると、コミュニケーションスキルが特に重要だと感じます。他の部署や社外から情報を収集し、ネットワークを築くことがビジネスにおいて不可欠であることを実感しました。社内外での交流を通じて新たなアイデアや企画が生まれ、自分の部署や企業全体の発展に寄与することができました。一期一会を大切に、コミュニケーション能力を更に向上させることが今後の成長に不可欠だと考えています。

コミュニケーションの大切さ

2年 野田圭一郎

私は、2022年の12月から、店舗のスタッフとしてのインターンを現在まで行っている。主な業務はお客様対応（配送や商品の取り寄せ）、商品の発注、週に一度行われる打ち合わせに参加するなどだ。

私は、このインターンを通して、多くのことを感じ、学ぶことができた。例えば、「相手の話を聞くこと」である。これまでの人生で事あるごとに言われてきていたことであつたが、その通りであると実感したのは今回が初めてであつた。私がある商品を配送したいと考えていた顧客の対応をした際に、自分がリードをしないといけないと考えすぎてしまい顧客の言っていることを聞いておらず、送ろうとしている商品と違うものを配送してしまい、お申し出があつた。主体は顧客であるのにも関わらず、相手のことを考えられていなかったため、起きてしまったのだと反省した。このことは、今後どのような職業を選択することになっても、必要なことであると感じており、良い経験になった。また、顧客に対してだけでなく、一緒に働く人達のことにもよく知る必要があると感じた。

私が働いている店舗の課題として残業の常態化と店舗の活気のなさがあつた。この二つの課題に共通している一番大きな問題は、スタッフ間でのコミュニケーション不足であつた。必要最低限の会話しかしていないため、わからないことがあつたとしても気軽に聞くことのできない環境であり、それによってミスが起これば店舗全体の雰囲気が悪くなり、より聞きづらくなるという悪循環が起こっていた。また、スタッフ同士が他の人が何をしているのか把握できておらず、適切な場所に人員を充てることができずに残業が発生してしまつていた。私はそのような状態から脱却するためには、しっかりとコミュニケーションができる環境を作ることが大切であると感じ、まず相手のことを知る必要があると考え、休憩時間が被ったときなどは自分から喋りかけてみるなど、少人数ではあるがコミュニケーションをとるようにした。回数を重ねることでその輪はどんどん大きくなってゆき、以前よりも店舗の雰囲気がよくなつていくと感じた。しかし、それだけでは店舗全体の雰囲気がよくなることはできないと考え、店舗内ですれ違った際に、お互いに会釈するというルールを取り入れることを検討している。そうすることで、普段喋らない人ともコミュニケーションをするきっかけになり、店舗全体の雰囲気がよくなるのではないかと考えている。最近は残業の時間も以前より減ってきており、継続的な取り組みをしていきたいと思っている。

今回の経験を通して私は、働いていくうえで自分が働く環境を重視しているのだということに気づいた。良い環境に身を置くことによって、働くモチベーションが高まり、より意欲的に物事を学ぼうという姿勢になることができ、働くこと＝お金を稼ぐだけでなく、新たなコミュニティの形成や自己成長の場にもなるのだと感じた。

客観的な思考について

2年 馬目 直治

私は今回、10月に都内のベンチャー企業にてライターとしてインターンを行いました。活動の内容としては依頼を受けた企業の魅力をまとめたコンセプト動画のシナリオ作りなどを行いました。

このインターンシップにおける活動の中で強く感じたことは、客観的な思考の重要性と、その難しさです。シナリオを執筆するにあたり、企業の取材データやホームページなどの多くの情報を分析しました。企業の情報をインプットし分析を行った後より魅力的に映るようアウトプットしていく作業というのは私自身が思っている以上に客観的な視点が要求されるものでありました。執筆した記事を読む読者の方々が求めているのはあくまで企業の情報であり私の書いた文章ではないということ意識するようになりました。そういった考えをするようになってから、執筆する際に自身の主観が紛れ込んでしまっていないか常に考えながら分析を行うようになりました。またフィードバックから、文章の内容は当たり前のことではありますが基本的にはデータに基づいている必要があるということ学びました。データの内容についてはその内容になる原因が必ず存在しており、偶然その結果になっているということではなく必然的にその内容になっているということ意識するようになりました。そのことを念頭に置き思考することが客観的に考えるということにつながって来ると考えるようになりました。

客観的な思考というのは実際のビジネスにおける業務の中だけでなく、今後訪れる就職活動においても非常に重要であると感じました。就職活動において、例えば自身の強みを聞かれた際に「コミュニケーション能力が高いです」や「英語が得意です」などの回答は主観の要素が強く、望ましくないと考えるようになりました。客観的に自身の有用性を示していくため資格を習得することや具体的な数値を用いることが必要であると考えました。また今後どのように行動していくかを考える際にも自身がどのようにすべきかという視点で考えるのは主観の要素が強くなってしまうため周囲から見て自身はなんの能力が足りていないのかということをも考え、その点を改善するために何をすべきかという考え方をすることで客観的な視点から成長していけると考えました。

働くことは責任を持つこと

2年 山田 莉子

成長産業支援事業を行う企業に、2022年12月から現在まで働いている。インターンの業務は大きく分けて二つある。一つ目は成長産業に特化した情報プラットフォームの更新だ。22,000社を超えるスタートアップ企業の情報から、150名以上の起業家・投資家・エコシステムビルダーの方々のインタビューコンテンツをリリースしている。インターン生は、これらの情報を収集し日々更新している。二つ目の業務は、セクション業務である。インターンの中でも、マーケティング・プランニングの二つのセクションに分かれており、私はマーケティングセクションで働いている。マーケティングは、データベースの会員数拡大のためにさまざまな施策を考え実行するセクションである。

実際のマーケティング業務は想像を超える難しさであった。B to Bのサービスということもあり、自分が経験したことのない立場の利用者のニーズを考えるのは、はじめての経験だった。どうしたら会員数が増えるのか、どんな情報をメルマガで配信したら見てもらえるのか、会員はどんな情報を求めて登録してくれたのか。どんな施策を考えるにしても社員の方々にたくさん話を聞き、アドバイスをもらいながら、細かいペルソナを立て、実行に移した。

インターンをする中で働くということは責任を持つことだと学んだ。インターン先の企業はインターン生に大きな裁量を与えてくれるが、最初の頃は社員の方々を目の前に「所詮大学生の自分なんか」と萎縮してしまい、なかなか発言ができなかった。しかし、社員の方々やインターンの先輩方が、「初めてなのだから失敗は当たり前。挑戦しながら学べ。」とってくださり、たくさんの挑戦をすることができた。そして挑戦する中で、責任が伴うことを学んだ。自分がやるべきことを的確に理解し、スケジュールを管理し、成果を上げることが求められ、もし自分がミスしたものが公に出たら会社の信頼に関わる。もちろんプレッシャーはとても大きかったが、自分の提案した施策が実際に利用ユーザーの目に触れた瞬間は、今まで経験したことのない達成感を得た。また仲間と働くからこそ、自分の仕事に責任を持たなくてはならないと強く感じた。どこまで自分が行う作業なのか、引き継ぐ際の共有の仕方等、少しでも自分が手を抜いてしまうと、仲間には大きな迷惑をかけてしまうので、自分の仕事には責任を持ってやり抜くことを大切にしたい。

このインターンの経験は私の将来のキャリア設計にも影響を与えた。普通の大学生活を送ってはいられないスタートアップの情報やトレンド、実際に起業した方々の話は好奇心をくすぐられるし、スタートアップの力で日本を変えられると信じている社員の方々と過ごす時間はとても刺激的であった。自分自身にも何かできるかも、ありきたりな人生を送るだけではもったいないと感じるようになった。

今回のインターンシップを通して大学生活ではできない経験を経てたくさんのことを学んだ。また、これらの経験は今後の就活や社会人人生で活かしていきたい。

ブランディングの大切さ

2年 刘 雨娃

私は、2022年11月から2023年9月まで、約1年間、芸能事務所にて女性アイドルグループのマネージャー兼スタッフのインターンを行った。主な業務として、ライブ会場の現場スタッフ、企画を考えると、SNS(Instagram、X等)を運用していた。現場スタッフでは、まずメンバーと集合し、会場に向かう。会場では、ライブの準備や物販を行い、特典会の準備も担当した。企画では、ファンの人が望むこととアイドルのやりたい事を織り交ぜて、新規層も参加しやすいように考えた。

インターンを通して学んだことは、売ることに對して、ブランディングの作り上げる重要さである。特に芸能の業界は、ものを売るのではなく人を売る業界である。それらの価値をいかに作り上げるか、運営によって成功するかどうかが決まる。ファン向けと新規顧客向けのブランディングを両立させること、さらに新たなファン層を獲得する方法について考えた。その中でもアイドルのブランディングには、ファンとの距離感を決める重要さを学んだ。身近さを感じさせつつ、グループとして応援してもらうためには、どのような企画を立てるのか、ライブの曲から、合間のトークまで考えた。

また私が、スタッフとして関わったグループは元AKB48のプロデューサーを筆頭に作られたグループであり、テレビや大きな会場でライブをすることが出来るグループという目標を掲げていたが現実には厳しく、厳しい現実を目にした。特に、地下アイドルの業界では新規の獲得が難しく、小さな輪の中でファンが回っているような形だと感じた。しかし、その中でも成功を収めるグループも存在した。どの部分がよかったのか、そのグループと比べてどこが足りないのか、成功例を研究することの重要性を感じた。私が行ったのは、有名グループのSNSを研究し、取り入れていったことである。メンバーの良さを写真と共に掲載し、新規開拓に繋げた。そして、グループでの連携の難しさを強く感じた。同じ方向を目指さなければ、潰れてしまうということ、これは、芸能ということもあり、露骨に見えた部分でもあると感じた。ブランドとして外部に訴えるためには、内部での一体性が不可欠であることを学んだ。それに加えて、コミュニケーションの重要性を感じ、共通のビジョンと目標を共有することの大切さを学んだ。

今回のインターンを通し、少しでも興味があることがあったら、そこに飛び込み、挑戦することの大切さを学んだ。自分の中で芸能業界には絶対に通らない道だと思っていたが、挑戦することで新たな学びを得ることができ、自分の得意不得意を知ることが出来た。この経験を今後の選択に活かしていきたい。

初めてのインターンシップを通して

2年 関 秀彬

私は、HR サービスに特化したアポイントメント取得代行会社で約4ヶ月間インターンをやっていました。私が主にやっていた仕事は会社の採用担当者を相手にアポイントメントを取ることでした。

私が上記の会社でインターンを経験することによって心から感じて考えたことがあります。それは、仕事や働くことに対して、抱いていたイメージと現実のギャップの大きさです。私は社会人と言うと、毎朝満員電車に乗って同じ会社に行き 具体的に何をしているかはわからないけど、1日中パソコンとにらめっこしている姿を想像していました。このように一見、仕事や働くことに対して、意識の低い想像を抱きつつ、また心のどこかでは、社会にとても大きなインパクトを与えたり、自分が いないことによって影響を受ける人が 多いような仕事をみんなこなしているんだろうなと思っていました。しかし、私が経験したインターン活動の 現実とは全く違いました。テレアポという営業で言うと、1番最初に新入社員が任せられるようなシンプルでかつ難しい、まためんどくさい仕事をひたすら繰り返すという 仕事を任せられていました。最初仕事を任せられた時は、インターン自体が初めてだったので、その勢いで頑張っていたりやる気もありましたが、2週間ほどすると、このインター活動が続けることによって、自分が得られるのはなんだろうと疑うようになりました。しかし そうは言いつつも何も得ないで辞めるのは何故か負けた気がして、とりあえず続けてみることにしました。最初は1日1個も取れないようなアポがだんだん取れるようになり、その成長でやる気が出たり、またアポを1つ取ると貰える報酬が大きかったので、稼ぎ面でも 満足のいく仕事でした。しかし私には根本的な疑いがありました。それは社会に出て、ここでのインターン経験が役に立つかもしれないけど、スキルとしてはそこまで役に立たないという事実です。確かに営業系の会社に行って新入社員としてテレアポをかける仕事を任せられたら、他の新入社員と比べると多少はスタートは早いかもしれませんが、しかし、スタートがちょっと早いそれだけの話です。早いと数ヶ月長くて6ヶ月後には全く違う仕事を任せられ、おそらく商談や実際に営業を回るような仕事をするようになるでしょう。私がインターンをしていた会社にはインターン以外にも社員さんが5人ほどいましたが、やっている仕事はインターンとそこまで大きく変わらなく、とりあえずアポを取る仕事をこなしていました。私はそれを見て3年5年経ってもアポばかりとっているのは役に立たない ちょっとレベルの高い単純作業に見えてききてしまい結局はやめることになりました。確かに私が任せられていた テレアポという業務は、営業で1番最初に任せられるような仕事だし、他の部署でも1番最初はこういった単純作業ばかり任せられると思います。私のように初めは物足りなさを感じたり、こんな単純作業に本気になるのは格好悪いと思う人も必ずいると思います。こういった思いを心の中でちょっと思う位なら大丈夫です。しかし1番簡単な仕事もできないのに難しい仕事はできる人はそこまで多くありません。私は今回のインターン経験によって仕事や働くことに対するイメージが大きく変わりました。また どんな仕事を任せられても、責任を持って丁寧に向き合う癖をつけることができたと思います。

HR コンサルタント会社」でのインターン体験

2年 加藤 菜央

私は、HR コンサルタント会社で4か月間働き、この会社で学んだことや初めてする経験、新たな発見について、このレポートで紹介していく。まずこの会社をインターンに決めた理由は、学生向けのインターシップを数多く紹介している「Wantedly」のアプリでスカウトされ、実際にインターンとして働いている方の話を聞くことで自分も同じ場所でインターンを経験したいと思ったからだ。他社と異なり、大きな裁量を持って仕事を任され、大学で学ぶことのできない実践的なスキルを身につける機会があると聞いた。だからこそ、自己成長や実践力、そして社会での仕事についての理解をより深められると思い、この会社でのインターンを選んだ。

HR コンサルタント会社で任された仕事は、累計200社以上に導入実績のあるメディアの運営だった。全く知識のない状態から、SEOを意識したメディア記事をゼロから作成していく過程は正直きつかった。何が正解か十分にわからないまま、一週間に1つは作成できるようにと伝えられ、出勤したら毎回パソコンとひたすら向かい合い、働いている人とコミュニケーションをとることもなく退勤することがほとんどであった。面接では、マーケティングを用いたメディア記事の市場調査やターゲットの分析を任せたいと伝えられていたのに、すべてを最初から任され、目指すべき場所もよくわからないまま一人で記事を作る仕事にギャップを感じてしまった。初めてする仕事に対して最初は好奇心をもって取り組むことができていたが、約3か月が過ぎ仕事にも慣れてきた頃、この仕事がずっと続くと考えると仕事への意欲ややりがいが見いだせなかった。一緒に働いているインターン生に、このインターン先での継続的に働いている理由を尋ねた際、「記事を書くだけで高い収入を得ることができるから」と言っていた。一方、入社前に面接をしてくれた先輩は、重要な業務（クライアントとの交渉など）を担当し、仕事への責任が大きいため、簡単に辞めることができなくなるとおっしゃっていた。これらの話を聞いて、私の偏見かもしれないが、ここでの労働時間が有効に活用されているかどうか疑問に思うようになった。また、代表の方が社員の方に対して怒鳴る様子も度々あり、怒られているのは自分ではないが一緒の空間で仕事をしていることから、そのような環境におびえてしまい仕事に集中できなくなることがよくあった。これらの背景から、今の大学生活という有意義な時間に充てることではないと思い、4か月後に退職させてもらった。

この会社で4か月間働いて得られた経験と学びは就活をする際に必要なことであったと思う。社会人の方と一緒に働くことで、社会に出て働く厳しさを知り、仕事に対する好奇心ややりがいの有無から自己分析と企業調べで就きたい企業をしっかりと見極めることの大切さを実感することができた。

好きを仕事にするとは

2年 関 夢果

私は、SNS 運用や映像制作を行うクリエイション会社で約5か月間の長期インターンシップを体験した。そこでは、大きく分けて3つの活動を行った。1つ目は、韓国情報を発信するインスタアカウントで短編動画のリールを中心とした投稿作成・発信。2つ目は、日本進出したい韓国企業や韓国関連の事業を行っている日本企業に SNS マーケティングを案内する営業メールの送信。3つ目は、韓国アイドルが利用している韓国コスメを発信する TikTok の運用に関する撮影・台本作成などである。

私がこのインターンシップ先を選んだ経緯は、自分が好きな KPOP や韓国コスメなどを仕事にすることは可能なのか、どのように好きな事を仕事にしていけるのか知りたいと思ったのがきっかけである。社長からよく伝えられていたのは、「質よりも量をこなせ」という事である。頭で考える前に行動という方針の企業であり、インスタグラムの投稿作成もマニュアルのようなものはなく、自分で自由に作成するというものであった。そのため、自分が気になる韓国アイドルの情報をまとめたり、自分が気になっている韓国コスメの評価をまとめたりした。自分が普段から行ってきた、韓国に関する情報を集めるといった作業が、仕事に繋がる驚きを感じた。営業メールでは、企業選択から送信内容まで自分で考えたのだが、マーケティングの知識が無いため、企業にどのようなメリットをもたらすことができるのか、どのような表現が相手を引き付けるか分からなくとても苦戦した。営業メールを送信しても、返信が来ることはほとんどなく自分がこの仕事をする意味を見出すことが出来なかったため、モチベーションを維持することが大変だった。しかし、そんな時こそ、インターン生同士のコミュニケーションの必要性が感じられた。インターン生で現状報告、今後の課題を話し合う事で、お互いの悩みに対してアドバイスをし合い、自分では気が付けなかった視点から見つめる事が出来るようになり、モチベーションを維持することが出来た。私が一番成果を出すことが出来たのは、リール作成である。リール投稿が1年ほど滞っていたため、リール投稿を全て任された。リールを作成する方法も分からなかったため、バズっているリールの研究をし、真似する事から始めた。最初のうちは、なかなか数字が伸びず1万再生も難しかったが、2カ月ほど続けると段々と再生回数、保存数が増え、65万再生を超える投稿も作れるようになった。そこで感じたことは、数をこなしてみないと分からないという事である。自分が作成した動画が少なければ、どのような動画がバズりやすいのか、どのようにしたらもっといいねをもらえるのか知ることは出来ない。最初になかなか結果が出なくて苦しくても、今後の成長に期待して耐える事も必要不可欠だと感じられる体験であった。好きな事を仕事にしてみて、仕事に対する負担を感じる事は少なかった。好きな事を仕事にしている人と話す機会も在り、その方々がおっしゃっていたのは、「仕事を仕事だと感じていない。」「今の仕事は私生活の一部のような感覚。」という事であった。とてもフレキシブルで、自分のやりたい事に挑戦できる環境は、仕事に対する精神的負担は少ないものの、モチベーションの維持、自己成長が自らの意志に委ねられていると感じられるものであった。

インターンシップを通して

2年 三宅 結菜

私は2023年の5月から6月の一か月間インターンシップを行った。インターン先はコンサルのベンチャー企業で、主な仕事内容は営業であった。その会社に決めたきっかけは単純で、インターンは何社も受けないと受からないと聞いていたことから、自分の希望勤務条件に合うという理由だけで応募したところ、運のいいことに採用されたので深く考えずに働くことにした。しかし今になると、応募・面接の時点からもっと情報収集をしてしっかり検討するべきだったと思う。

今回一か月しか続けなかった理由は、自分に仕事内容があってなくてインターンが大きな負担に感じてしまったからである。面接時、仕事内容の説明はもちろん受けたがその内容は「この会社はほぼインターン学生で業務が回っているので、人事から企画、営業までたくさんの業種を経験することができる」というものだった。しかし実際に私が行っていた業務はインサイドセールスで、毎日100件を超える電話を美容室などにかけるというものであった。もちろん電話をとった側は全員が応じてくれるわけではなく、営業と分かった時点で態度が変わったりガチャ切りされることが多かったため、続けるにつれて精神的負担につながった。また毎回業務内容がフォーマットを読む単純作業であったため、とても退屈だったことも辞めた原因の一つである。

しかしこのインターンシップを通して学んだことは主に3つある。一つ目は私にはtoC営業が向いていないということである。今回はインサイドセールスだったからより負担に感じたのかもしれないが、営業という成果至上の職種自体自分にあっていないうえに、toCという営業を受けることをよく感じていない人に向けた営業は向いていないと思った。二つ目は情報収集の大切さである。特に就職活動では、インターンの面接のように実際働いている人と一対一で話せる機会などほとんどないと思うため、より自分から説明会に行ったりインターネットを使って情報収集を怠らないことが、実際就職活動時と実際働いた時のギャップをなくすため必要不可欠だと思った。また就職活動はインターンシップ先を探すよりも焦って内定を取ることがゴールになってしまい、妥協しがちになると思う。しかし何か一つでも妥協して決めた就職先は、結局やめてしまうのだということが今回の経験で分かったので、妥協することがないように自分の強みやスキルを伸ばしておくことの重要性を感じた。三つ目は楽しく働けることの大切さである。どんなに大企業でも給料が安定していても、楽しくなかったら意味がないとこのインターンシップを通して強く感じた。仕事は人生のうち大きな割合を占めているのに、それが負担になってしまったら働く意味がないと思うので、自分に合った環境で楽しく働ける職場につけるよう、就活を頑張る理由がはっきりした。

この経験は私にとって、実際の就職活動に向けたとても良い機会だった。今回気づけたことを生かして、これから始まる就職活動を頑張りたい。

目標と生き方

2年 宮原 命

私は、なにか人のキャリアについて関わることができる職を経験したいと考えていたため、キャリアカウンセリング事業を中心に行っているベンチャー企業で長期のインターンシップを行いました。週1~5回程度シフトに入り、約半年間就業しました。仕事内容としては、CX という部署に所属して、事務局としてお客様とチャットでのやりとりや、メールのお問い合わせ対応、ご案内架電を行ってまいりました。春学期の事前指導授業内で、どのような働き方の会社が良いのか、今どんな会社に行くべきなのか、どんな会社があるのか、ゲストも招きながら教わっていたことで、仕事内容はもちろん、会社の雰囲気、ルールについてもよく見ながらインターンシップができたと思います。私がインターンシップを通して、感じたこと、考えたことは2つありました。

1つ目は、働き方の柔軟性です。私のインターンシップ先では、やり取りはほとんど全て Slack の中で完結していました。そのため、オフィスでもリモートでもできる仕事が変わることはほぼなく、ミーティングや月1回の全社会議も、リモートで繋いでる方もいました。また、たとえリモートであっても、なにか仕事分からないや話し合いが必要な時は、ハドルミーティングとして、リモートで繋ぎ、直接会っているかのように仕事を進めていました。こうして基本的にどこにいてもどんな状況でもパソコンがあれば仕事ができるため、少しの体調不良を感じたらリモートで、とか、症状はないけれどコロナやインフルエンザかもしれないから念の為にリモートで、など会社に来れないからその日は仕事出来ません、とならないことも良いと感じました。そのため効率的に仕事ができ、これからはリモートでも問題なく仕事ができることが大切だと感じました。他にも、会社に行かなくても仕事ができるということで、産休育休がとりやすく、復帰をしやすいのもこれからの働く形にとっても大切だと感じました。

2つ目は、それぞれの社員の目標は違くとも会社の向かう方向は同じであるということです。私が今回インターンシップをした企業では、キャリアカウンセリングを主としているため、カウンセラー・トレーナーが書いた note があるのですが、そこに書いてある、社員それぞれがカウンセラー・トレーナーになった理由や個人の目標はバラバラで、同じではありませんでした。しかし、「誰かのためになりたい」「自分の過去から誰かの支えになりたい」といった共通する目標の軸があることは同じでした。よって、それぞれの目標は異なっても、方向性は同じであるからみんなが頑張れて、会社としても上手くいくことが出来ているんだなと考えられました。

以上の感じたこと、考えたことを踏まえて、これからの自分に活かすことができるのは、会社の働き方をしっかり確認すること、会社の目標に合わせるのではなく、自分の持つ目標の軸が会社の目標と合っているかを確認することだと考えました。自分の中での目標と、軸の整理。やはりさまざまな経験をして自分というものを厚くしつつ、自己分析をして整理をしていくことが就活や人生の道を決めていくことに大切だと感じました。人のキャリアに関われる職でインターンシップが出来て良かったです。

SNSマーケティングとコミュニケーションの学び

2年 岡 碧依

私は渋谷にあるSNSマーケティングの会社で、ライブ配信のマネージャー業と、企業のTikTokアカウントの運用代行を2023年6月から11月まで、約半年間行った。具体的には、担当しているアカウントの企画、撮影、編集から成果報告の資料作成まで所属しているインターン先の学生がほとんど全ての工程を担っていた。

このインターンシップを通して私が強く実感したことは、働く環境の大切さである。インターンの活動は学生主体だったこともあり夜遅くに会議が行われたり、先方の急な予定の変更で納期が早まることがあったりと、これまで自分が送ってきた生活のリズムを変えなければいけない部分が多くあったが、それでも自分が半年間続けられた大きな要因として、人間関係の良さがあげられると考える。悩みを相談できる同期、自分のことを気にかけてくれる上司の存在があったことは働いていく上で不安を無くす大きな拠り所であった。就職先を選ぶときに大事にする軸として、もちろん自分のやりたいことや収入面など多くのポイントはあると思うけれど、働いている人たちの話を実際に聞いてこれから一緒に働きたいと思える人を見つけて働く場所を選択したいと感じた。

インターンシップで上司の方から、自分都合で話しているせいで説明が下手な人が多すぎると言われたことがあった。話すときには結論から伝え、事実と解釈をしっかりと分けて報告をしなさいと教えていただいた。思い返してみると自分はこれまで人に伝わりやすく話すということを意識的に行ったことはないなと実感した。その際に紹介されたPLEP法（結論→理由→具体例→結論）を徹底して半年間発言をしていたら、多くの人から内容が簡潔でわかりやすいと褒めていただく機会が増えた。仕事をしていく上で切っても切れない人と人との関係の中で、伝わりやすいように伝える側が配慮して話してあげることはとても重要であると思った。

インターンシップの経験は、単に業務スキルを磨くという以上のものだった。コミュニケーションの重要性を認識し、相手に情報をわかりやすく伝えるための方法を学んだ。特に、PLEP法を使って結論から話し始めることで、相手の理解を助け、より効率的な情報の伝達が可能になった。また、チームで作業する中で、人間関係の構築がいかに仕事の成果に影響を与えるかを体感した。同僚や上司との良好な関係が、困難な状況でも仕事を継続するモチベーションとなり、また自分のキャリアプランを考える上での新たな視点をもたらした。

SNSマーケティングという速いペースで変化する分野において、こうした経験は特に価値がある。短い注意を引くコンテンツ作りにおいて、相手に伝わる簡潔なメッセージを作る技術は不可欠である。この半年間は、技術的なスキルだけでなく、人間としての深い洞察と成長を促す時間となった。今後も、こうした人間関係を大切にしながら、さらなる学びと成長を追求していきたいと考えている。

インターンシップに参加したことで得られた学び

2年 田中 初花

私は、学生のキャリア支援を行っている会社のインターンシップに参加し、一か月間営業の業務を行った。会社自体は営業以外にもマーケティングやマネジメント業務、人事や広報の仕事もあるが、私は営業部に配属され、その中でもインサイドセールスを担った。インサイドセールスとは、企業のオーナーや担当者と商談し契約をとるフィールドセールスの前段階で、非対面で顧客とコミュニケーションをとってアポイントメントを獲得するという業務内容である。私は電話での営業を行った。私は、将来進みたい職種や業界などが特になかったのでこのインターンを行った。今までアルバイトも含め営業に関する仕事は一切経験したことがなかったのだが、授業の一貫で営業職のインターンができたのは良い経験だった。このインターンを通して学んだことが三つある。一つ目は、働くということの厳しさである。学生時代は、結果よりもそこまでの過程や努力が認められていたが、会社に入るとどれだけ頑張っても成果を出さなければ会社に貢献できないのだと実感するとともに、自分の社会に対する考えが甘かったことを思い知らされた。電話をかけても繋がらない、繋がったとしてもすぐに切られてしまうことがほとんどだったので、話を聞いてくれる顧客に興味を持ってもらえるように商材の説明をすることに苦労した。実際にテレアポ業務を行って、営業職には強いメンタルと忍耐力が必要不可欠だと感じた。電話をかけると文句を言われることも少なくなかったため、慣れていない私は精神的に辛くなってしまい、結局一か月で辞めることとなってしまった。二つ目は、責任の重さである。このインターンは成果を出せるかが個人プレーだったこともあり、一人一人の責任の重さをより強く感じた。周りの人と助け合いながら働くアルバイトとの一番の違いだと思った。スクリプトを自分の言いやすいように書き換えたり、ロールプレイングを先輩に練習してもらったりしたことは自分の成長に繋がられたのではないかと思う。三つ目は、インターンでの経験を自己分析に繋がられたという点だ。それは対面ではなく電話での営業だったが、営業の仕事は自分には向いていないということを発見できた。インターンを行う前は、インターンに参加する意味が自分の向いている仕事の発見にあると思っていた。しかし、私のように将来進みたい業界が定まっていない人は、自分の向いていない仕事を見極めることにも活用できると考えた。一方で、学生主体で業務を行っているというのは私に合っていたように思う。初めてのインターンで分からないことが多かったので、年齢の近い人が多くいたのは質問をしたり悩みを相談したりしやすかった。会社で何をすることも大切だが、一緒に働く人たちを含め周りの環境も会社を選ぶ上でのポイントになってくると考えた。また、長くこのインターンが続けている先輩方を見ると、仕事を続けていく上で自分にとってやりがいを感じられるかも重要な観点であると感じた。二年生の時点で自分の特性が発見できたことやインターン生として会社の中で働くという経験をしたのは価値のあることだと思う。自分で具体的な業務内容や社風などにも目を向けて会社を選ぶことも大切だと学んだ。今の自分にできることを見つけ、就職活動や就職後のキャリアに活かせるようにしていきたい。

Ⅱ. 成果報告（体験エッセイ集）

4) 松浦クラス

インターンシップ先・実施期間一覧（松浦クラス）

	氏名	インターンシップ先	実施期間
1	上岡 蒼汰	清掃サービス	5日間
2	及川 亮汰	広告代理店	5日間
3	大月 怜	建設	5日間
4	小野 桃香	化粧品広告	長期
5	加藤 圭将	レンタカー	5日間
6	加藤 みゆ	総合セキュリティ	5日間
7	川嶋 大貴	ITコンサルティング	長期
8	岸 桃子	情報サービス	5日間
9	窪田 菜帆	ITコンサルティング	長期
10	坂本 篤美	翻訳サービス	5日間
11	中村 紗衣	縫製品加工・販売	5日間
12	生井 友里香	不動産	5日間
13	安田 麻央	福祉サービス	5日間
14	山本 真衣	情報サービス	5日間

陰で支えてくれる人がいる

2年 上岡 蒼汰

2023年夏、私は人生で初めてインターンシップに参加しました。インターンシップ先は、日本における最大手の清掃関連用具レンタル企業の子会社で、東京都内で5日間働きました。主な業務内容として、社員の方と2人1組で客先へご訪問し、マットやモップ、空気清浄機のフィルターなどの交換作業を行いました。新宿や池袋、中野、目黒など様々な地区の幅広い業界でルート営業を行いました。

春学期の授業内でインターンシップ先の選び方を学びました。しかし当時の私には「こんな業界がいい！」や「こんな仕事をしてみたい！」といった拘りはありませんでした。そのためインターンシップ先を選ぶのに苦労しましたが、いっそのこと全く興味・関心のなかった仕事をしてみようと思い、清掃業界に携わってみよう決めました。プログラムは、初日と最終日に企業説明や振り返りを行い、間の3日間でルート営業に同行をするという内容でした。中でもルート営業の同行は、今後の人生にとって非常に価値のある経験となりました。

ルート営業の流れとして、まず出社してすぐに、当日のお客様の商品を車に乗せる作業を行いました。一日に約30~60件の取引先があり、中には一件で10枚近くのマットを交換することもあったので、多量のマットを車内に詰め込みました。ただひたすらマットを運ぶだけでもかなり大変でしたが、マットは色や大きさなど種類が異なっており、それを誤りなく運ぶことが重要だったため、体よりも頭を使ったように思います。作業終了後、お客様のもとへ出発しました。

交換作業は本当に様々な場所で行われました。飲食店やオフィス、病院、保育園、宿泊施設など、一日で多種多様な場所を訪問しました。時間が限られているため、迅速に交換を行うことは勿論、丁寧さを心掛けることが一番大切だと学びました。その積み重ねが安心と信頼に繋がり、契約して下さるお客様が増えるとのことでした。また飲食店ではピーク時を避けたり、保育園ではお昼寝時間に交換したりと工夫されていました。そういった気配りは清掃業に限らず、どの職業でも必要なスタンスだと思いました。交換をすべて終えた後、会社に戻り片付けをして一日を終えました。

今回、清掃業界のインターンシップに参加して、私たちは知らぬ間に清掃業界の方にお世話になっていたと一番感じました。意識してみるとマットや空気清浄機は様々な場所に設置されています。正直なところ、目立つ職業ではないかもしれませんが、陰でしっかりと社会を支えている立派な仕事だと感じました。また「底辺職ランキング」という記事を目にしたことがありましたが、断固として否定したいと思いました。たとえ地味な職業であろうと、社会を担って働いている人はカッコいいのだと実感しました。将来どのような仕事に就くのか分かりませんが、どの職業に就いても社会を担っている一員だと誇りをもって働こうと思います。また今回のインターンシップを通して、世の中は知らないことで溢れていると感じたので、学生のうちに沢山の経験を積み、働くことへの価値観を形成していきたいと思いま。

ひと 他者と仕事をするということ

2年 及川 亮汰

今回私が行ったインターンシップ先の会社は、従業員数約40名の中小広告代理店である。この広告代理店は年間受注数が約2000件、顧客数が約10000社で官公庁とも多くの仕事をしている。この会社には、主にクライアントとの商談や見積り制作、企画提案をする営業部と、依頼された広告のデザインやロゴ制作をする制作部の2部門がある。今回のインターンシップでは、営業部の仕事としてクライアントとの商談から実際の広告プランの作成までを体験することとなった。インターンシップの流れとしては、1日目に疑似クライアントとの商談を行い、2日目から4日目までグループのメンバーと共に広告プランの作成、検討を重ね、最終日に疑似クライアントに対して作成した広告プランのプレゼンテーションをするというものだった。

今回のインターンシップと春学期の事前指導を通して私が学び、感じたことの中から、2つ抜粋して以下に挙げる。

1つ目は、歩み寄りの重要性である。今回のインターンシップでは、ほとんどの時間をランダムで分けられたグループのメンバーとの共同作業に費やすこととなった。これまでの人生の中で人と関わる時には、自然と同じような価値観や考え方を持っていたり、気の合う人とばかり関わっていることが多く、基本的に不自由のない関係を維持できていたが、今回のインターンシップでは即席のグループなので、価値観や考え方の部分で衝突しそうなことが多くあった。しかし、社会に出てこのようなシチュエーションになることは容易に想像できるので、そのような状況になったときに、自分の意見だけを主張しようとするのではなく、対話を通してお互いに歩み寄っていくことが必要なことだと感じた。

2つ目は、仕事に対する誇りと責任についてである。今回のインターンシップの中で社員の方が仕事内容や会社について説明しているのを聞いて、社員の方々がどれだけ自分の仕事に対して誇りや、責任感を持って日々の業務に取り組んでいることを身に染みて感じることができた。これまでの私は仕事をとりあえずこなして、給料を貰えればいいと思っていたが、その考え方は非常に甘く、社会を舐めていたと思い知らされた。この経験から私は今まで以上に仕事というものに対して真剣に考える必要があると感じた。

最後に、今回のインターンシップを通して、これからの自分に必要なことについてまとめていく。今回のインターンシップを通して、私はもっと視野を広げ、多様な人々と様々な経験をする必要があると感じた。仕事というものは、学校のような狭いコミュニティの中で行われるものではなく、ときには社会全体を大きく動かす可能性を秘めているものなので、自分の見えている範囲の思考で終わらせるのではなく、多くの経験や異なる知見を活かせるような人材になっていく必要があると感じた。

働くということ

2年 大月 怜

自分が伺ったインターンシップ先は、千葉県に本社を構える地元では有名な大手建設企業であった。5日間の実習内容は、実際にマンションの間取りの設計や建設現場の視察などの実習を通じて土地開発や施工管理などの業界における専門的な知識を習得したり、この建設会社が買い付けた土地にどのような建築物を建設することがベストなのかを考え、営業部の方々を始めとした社員の前で建築企画提案を行うといった実践的なものであった。

上記のインターンシップを通じて私が感じたことは大きく分けて2つある。

第一に、「営業」という仕事が如何に難しいかということである。実習内容の2日目に付与された建築企画提案は、土地の視察から周辺状況の調査、予算の管理などを始めとした本格的な営業プロセスを個人の力のみで行うというものであった。ここにどんな建物があつたら流行るだろう、どうしたら街が若返るだろう、周囲の地域との親和性があるかななどを様々な要素を組み合わせ、アイデアを形にし、顧客を満足させるための企画提案を作り上げることは並大抵の苦勞ではなかった。正直なところもっと私は「営業」という業務を簡単なものとして捉えていたのだと思う。自学部の卒業生の多くが営業職に就くという状況も考慮すると、今後本格的にインターンシップや就職活動に臨む際には、今回の経験を活かし、営業職についてより真剣に見ていくことが重要だろう。

第二に、事前準備を入念に行うことがインターンシップにおいては重要な要素であるということだ。私は文系学生の枠で営業と事務の仕事に応募していたのだが、実際に実習が開始した後で、設計や施工管理などの理系の知識が必要とされるものがインターンシップの業務内容に盛り込まれていることが判明した。このような齟齬は、対面面接や企業との連絡等の事前の行動によって避けることが可能であったと考える。また、その実習における理系学生との知識量の差も感じずにはいられなかった。建設業界に関する知識を多く持っている理系学生の設計作品や営業企画は、どれも個性に富んでいて素晴らしい物であったと記憶している。インターンシップに参加する際には、業界に対する知識をより十分に蓄積し、他の参加者や企業が求める人材と自分のギャップを埋めるための準備が必要であると考える。

全体を通して、インターンシップに参加したことで「仕事」というものの実態を少しでも体感することができたのではないと思う。たった5日間という短い期間の中でも得ることが非常に多く、特に企画提案で得た自分のアイデアを形にして他者に伝えるという経験は、大学の授業やゼミの発表などに応用することが出来るのではないかと考える。また、自己の能力と目の前にある課題を比較しながら、何が課題解決に必要であるか、何を優先させるべきか取捨選択し、考えながら行動することがインターンシップや就職活動、その上さらに社会人にとって重要なことなのだと感じた。

S N S 運用のリアリティショック

2年 小野桃香

私が選んだ実習は、韓国コスメのインスタグラム運用をする企業の長期インターンシップでした。私の今年の目標に長期インターンシップの挑戦を入れていたこと、情報を発信し影響を与えられる仕事への興味があったことから、この企業を選びました。また、一番好きな分野で仕事をしたいと思っていた私は、日本初上陸の韓国ブランドという文字にも魅力を感じ、応募を決めました。仕事内容は、主に商品のPRのための、①ブランドにあったインフルエンサーさん探し、②インフルエンサーさんとのDM対応、③ギフトングする商品の発送業務でした。夏休みであったため、週に3日五反田オフィスへ通勤し、平均5時間ほど勤務していました。オフィスはとても自由な雰囲気ですーツを着ている社員は居らず、インターン生も全員私服で出勤可能でした。私が楽しいと感じた業務は、SNSに掲載する動画の撮影でした。プロのカメラマンによるマスカラのPR動画の撮影でした。にどのように映せば魅力を感じるか、どんな音楽だとターゲットを惹きつけられるかなどインターン生だけで考えるものでした。また入社前にGoogleのスプレッドシート、ドキュメントの使い方を知っておいてよかったと感じました。全てこれらを使いこなせなければ始まらないタスクでした。しかし、実際には長時間パソコンに向かって事務業務をする作業がほとんどだったため、SNSに掲載する動画やキャンペーン画像のコンテンツを1から製作するというイメージがあったので、リアリティショックを感じたのは事実です。まだ2年生なので、基本業務を始めとして広く仕事ができるようになってほしいとの上司の意向もありましたが、ほぼ毎日同じことの繰り返しで自分に身につくスキルが少ないように感じました。就職活動前に知っておきたかったのですが、常に関わる社員さんは一人のみであったため、社会人マナーもほとんど身につけることができませんでした。その中私が、インターンシップで得られたことは、聞く力、話す力です。上司と話す際、自分の理解できなかった部分をいかに端的に相手に伝えられるかを意識していました。社員のサポート業務などで新しいタスクをもらった際、入社当初は、良い言葉を選ぶことが出来ず、聞きたい部分を即座に得られませんでした。上司の方が忙しいからと途中で違う人に引き継がれて、悔しい思いをしてから、タスクを行う際、論理的に物事を考え、自分の行動に優先順位をつける習慣を身につけるよう意識しました。また、今回のインターンシップは、面接での選抜で、来年の就活準備の予行練習になったと思います。3年生でいきなり、準備するより、ESの書き方や、就活アプリの活用法を少しでも知ってから挑む方が精神的な安心や、効率的な就職活動に繋がると思いました。なお、自分の趣味に近い分野のインターンシップに挑戦するのも、理想と現実の比較ができるという面で有意義でした。自分の興味なかった業界のインターンシップに参加するのも大切だと感じました。入社前の面接選考の際、仕事内容をより深く知るための質問を全く用意しなかったことを後悔しているため、これからインターンシップに参加する前に、社員の方へ仕事内容やインターン生得られるスキルなどを掘り下げた質問を実践しようと思います。

プレゼンは慣れるしかない

2年 加藤圭将

2023年の9月、自分は愛知県にある大手レンタカー会社で5日間のインターンシップに参加しました。活動内容は多岐にわたり、ビジネスプランを考えるグループワーク、プレゼン、店舗での業務体験など多くの貴重な体験をさせていただきました。

春学期の当初、自分は2年生でインターンに行くなどと考えもしていませんでした。第2志望で受講した授業に対して、気乗りしない自分がいました。ですが、松浦先生が「2年生でインターンに行くことに大きな意味がある」とおっしゃっており、この言葉を聞いて、どうせいずれインターンに行つて悩むなら早いうちから参加してやろうという心情になり、やる気が出てきたのを覚えています。

レンタカー業界は最初から志望していたわけではなかったです。最初はエンタメ業界に行きたいと思うすら思っていました。が、単位取得条件に合わないという理由で面倒な面接から逃げるように先着募集のレンタカー業界を選びました。ただ、楽をしたいがためにしたこの選択にも大きなメリットがあり、自分を見つめ直す機会、成長へ繋がる気づきがたくさん得られました。結果として自分の全く知らない世界について触れられたからだと思います。

自分がインターン中に価値ある体験をした場面として、新規出店店舗のコンペ内容を考えるグループ活動があります。この活動はインターン初日にテーマを与えられて、最終日の発表に向けてグループでプレゼン内容を考えるというものでした。この活動を通して自分は2つの気づきを得ました。1つ目は初対面の人と活動をするコミュニケーション力が自分にあったことです。自分は人と話すことが好きであり、人に対して興味を持ちやすいタイプです。この個性がグループ活動を通して生きて、初めての相手とでも打ち解けるのに時間があまりかかりませんでした。この体験がこれからの就活や仕事内容に繋がるように、これからも初対面の人と話す機会を積極的に取り入れていきたいです。2つ目は自分は大勢の前で話すことが不得意であると実感したことです。インターン中はグループ発表をする機会が多く設けられていました。その中で発表をする際に、準備がしっかりできているのにも関わらず、発表になると伝えたいことが思ったように伝わらないことが頻繁にありました。自分はあるが、大勢の前で話すといつものように話すことができないのだなと痛感しました。今後の大学生活では、ゼミなどで人前が出る機会が増えると思うので、少しでも慣れていき、自分の弱みを無くしていきたいです。

インターンシップに参加することは自分にとって、学校や経歴、趣味など全く違う考えを持つ人たちの集団で活動をする価値ある経験になりました。自分は何ができて、何ができないのか、何が必要なのかを見つめ直す良いタイミングともなったため、ここで得られた経験を糧にこれから就活に臨んでいきたいです。

未知の世界に飛び込む楽しさ

2年 加藤 みゆ

私は、主に警備事業や防犯システム販売事業を行っているセキュリティ会社のインターンシップに5日間参加した。インターンシップ中の業務内容としては、初日は企業説明が行われ、2日目以降は社員の方の営業への同行や警備員の方のシフト作成などを行った。最終日は、求人用のポスターを作成し、社員の方からフィードバックをいただいた。私のインターンシップ先では、アイデア提案や問題解決に向けたグループワーク形式ではなく、社員の方とペアになってお手伝いをする形だったので、実際に社会人として働くイメージをつかむことができたと思う。

今回のインターンシップを通して、多くのことを学んだが、ここでは主な気づきを3つ紹介する。

1つ目は、不安なことや分からないこと、気になることがあったら躊躇せずに聞くことも大切だということだ。インターンシップ中、いただいた仕事をやる上で分からないこと、合っているか不安なことがたくさんあった。最初はペアの社員の方に聞くのは仕事の迷惑になってしまうのではないかと考えてしまい、質問するのを躊躇していた。しかし、途中から思い切って積極的に質問したところ、フィードバックの際に、積極的に質問してくれたから安心して仕事を任せることができたと言ってもらった。自分で考えることももちろん重要だが、人に聞くことも大切だということを知ることができた。

2つ目は、意外な自分の強みを知ることができたということだ。私はこれまで人と関わる仕事は向いていないと考えていた。しかし、インターンシップの経験を通して意外と人と関わる仕事も楽しいかもしれないと思うようになった。例えば、電話対応を通して取引先の方と話したり、警備中の警備員の方のところまで出向いてお話を伺ったり、人と話す機会を、楽しむことが出来た。人と話すのが苦手だと思いついていたが、今回で苦手意識をなくすことができた。

3つ目は、興味がないと思っていた業界でも、インターンシップに参加してみると興味がわいてくることに気づけたことだ。私が今回参加したインターンシップ先は警備業界だったが、全く興味のある業界ではなかった。家から近く、条件に合っていたという理由だけで選んだ。当初は、警備業界は不人気な業界という印象が強かった。しかし、実際にインターンシップに参加してみてその印象が変わった。私が今回参加させていただいた会社では、現場の警備員さんと管理を行っている営業所の方の仲がよく、信頼関係がしっかりできており、職場環境のよさが伝わってきた。また、今回お世話になった社員の方も非常に優しい方ばかりで、楽しそうに働いていたのが印象的だった。このことから、興味がない業界のインターンシップに参加してみるのも、業界を知るよい機会になると思う。

2年生でインターンシップに参加したことは大きな一歩になったと思う。インターンシップに参加したことで、自分の強みも弱みも見えてきた。ここで学んだ経験を活かして、積極的に様々なインターンシップに参加し、次はもっと自分の力を発揮できるようにさらによい経験を積みたいと考えている。そして自分にとっての最適な業界、仕事を見つけていきたい。

厳しさと格闘する日々

2年 川嶋 大貴

文系大学生の多くは営業職に配属されているといわれています。私自身も、長期的なキャリアの中で、営業を経験する可能性が高いのではないかと感じ、営業職の長期インターンに参加しようと考えました。営業職を経験できるだけではなく、営業職の仕事を出来る限り幅広く任せてもらいたいと考えていたため、あえて従業員数十人以下の会社を探しました。結果として、三度の面接を受け、代理店営業を行っているベンチャー企業に九月から入社し、大学が全休の日に週二回フルタイムで入社し、現在も継続して勤務をしています。

前述したとおり入社するにあたって、三度の面接を受けました。一次面接、二次面接はオンラインで、最終面接は対面で代表取締役の方と実施しました。面接の過程で事前準備の大切さを強く実感しました。会社が何をやってどういう理念をもっているのか、自身が現在に至るまでに何をやってきたのか、入社して何を得たいのか、他にも面接でよく聞かれる質問に対する回答など、できる限り準備をして最終面接に臨みました。予想外の質問も多くありましたが、周到的な準備を行ったこともあり、入社を決めることができました。二年生の夏の段階で選考を受けることができ、とても良い経験ができたと思っています。

入社後は、法人向けのテレアポ、個人営業に近い店舗に対するテレアポ、商談同席、飛び込み営業同席など幅広く業務を経験することができました。現在はまだ一人で商談を行えていないのですが、上司の方から「後々は商談を任せる」とも言ってくれました。私の現在のメイン業務はテレアポになります。テレアポのアポ獲得率は商材にもよりますが1%前後と言われており、「ガチャ切り」をされたり、全く相手にしてもらえなかったり、怒られたりがほとんどで精神的に辛いことがたくさんありますが、その中でアポを獲得した時は喜びがこみ上げてきます。初めてアポを獲得することができたときのことは鮮明に覚えています。

また、インターンを通じて働くことの厳しさも学びました。ビジネスにおいてどの仕事も数字に追われるのですが、営業はそれが顕著です。お客様から詰められ、結果がでないと上司から詰められ、入社時に一緒に営業を担当した社員が二人いたのですが、二人とも一年たたずに辞めてしまいました。私も来年から就職活動が始まるので、仕事におけるミスマッチの怖さを痛感しました。社会人生活は長いので、現在行っているインターンや自己分析を通じて、自身の強みを理解して、その強みをしっかりと活かせる仕事に就けるよう努力していきたいと考えました。

インターンを通じて、職種への理解はもちろんのこと、今後の自分自身の考え方・価値観も変わったと思います。勇気を振り絞って長期インターンに参加したのは大きな財産になっていると思うので、今後も頑張っていきます。

ピンチをチャンスに変える力

2年 岸 桃子

この夏、私は2つの企業でインターンシップを行いました。まず、コンサルティングやシステム企画立案から運用・保守など、システム構築をトータルで請け負うシステム会社で2日間インターンを実施しました。この企業のインターンシップでは、グループワークで、航空会社の予約サイトの改善案のプレゼンを行いました。もう一方の企業では、ゲームやITシステムなどを開発しているソフトウェア開発企業のオンラインインターンで、こちらは5日間参加しました。内容としては、5人のグループメンバーで一つのゲームを完成させて、プレゼンするというものでした。

システム会社での2日間のグループワークは3人のメンバーとアドバイザーの社員で行われました。初日のグループワークは、メンバー同士探りあっている状況で、他のグループと比べて進度が遅れていました。困難を感じつつ、2日目を迎えると、グループメンバーが1人欠席したため2人で行うようにと告げられました。ただでさえ、私たちの班は進度が遅れているのにも関わらず、1人メンバーが欠けてしまったことに、私は大きな不安を感じました。一方で、プレゼン発表までの時間のリミットがあることから、切り替えていかなければならないという気持ちにもなりました。ここから、自分の動き方が変わったと思います。もう1人のメンバーから意見を聞き出し、より質の高いアイデアを求めるようになりました。また、時間に限りがあったため効率性も重視し、もう1人のメンバーと、お互いの作業の進捗についてコミュニケーションをとり、連携してプレゼン資料を完成させました。こうした動き方見て、アドバイザーとしてついてくださった社員が、2日目からの積極性と作業品質を評価してくださりました。そのおかげで、自分の行動が評価されていることに満足感や達成感を得ることができました。

もう一方のオンラインインターンでは、ゲーム制作の概要をzoomでミーティングした後に、オンラインチャットで連絡とってゲームを完成させました。初対面かつ、顔が見えないチャットでの作業は、対面のグループワークと比べて、不安感を強く感じました。また、プログラム未経験歓迎と記載されていたにもかかわらず、私以外のメンバーはプログラミング経験者で、プログラミング知識があることが前提でグループワークが進んでしまい、消極的になってしまいました。しかし、この出来事は自分ができることは何かを考えるきっかけになりました。プログラミングはできないけど、毎日の会議の議事録をとることやプレゼン資料を完成させること、メンバーの作業の進捗を把握し、計画を立てることなど、チームに貢献できることは沢山あることに気づき、それらを積極的に担当しました。

今回、どちらのインターンシップでも想定外の出来事が起きたため、頭を悩ませることが多かったです。しかし、この経験から物事が予定どおりに進むことはないことを学び、自分のおかれた状況でどう考えてどう行動するかということが重要であると気づくことができました。ピンチをチャンスに変える力こそ、今の自分に必要なことです。インターンシップを終えて得たこの力を、これからの学校生活や就活、社会に出た後も、さらに磨き活用していきたいと思います。

主体性が命

2年 窪田 菜帆

今回の長期インターンシップは、SNS マーケティング企業で貴重な経験を積む機会となりました。私は4ヶ月間、この企業で長期インターン生としてお世話になりました。主な仕事内容は、企業が売り出したい商品を紹介してくれるインフルエンサーとの仲介業務です。企画の打ち合わせからインフルエンサーの選定、インフルエンサー起用前後における商品の売り上げ推移のレポート作成まで、様々な業務を担当させていただきました。

このインターンを通して、与えられた以上のことを自分から積極的にやることの重要性を痛感しました。私はこれまで飲食やイベントスタッフなど様々なバイトを経験してきましたが、これまでのバイト経験では、「指示されたことをやる」、「与えられた仕事の中で最大限頑張る」が当たり前であり、自ら考えながら主体的に仕事を進める機会は少なく、すでにあるマニュアルに沿って仕事を進めていました。しかし、このインターンでは、常に主体的な行動や発言などの積極性が求められ、教えてもらったやり方で与えられた仕事をこなすことは当たり前で、さらにそこから自分で何が必要なのかを考えて行動する必要性がありました。

印象的な瞬間の一つとしては、クライアントとの企画の打ち合わせが挙げられます。その企画はファッションイベントに関するものだったのですが、話し合いを進めていき、クライアントが実現したいものが明確になってくるにつれ、私は、当初クライアントが提示した予算ではその結果を得られることは難しいのではないかと思うようになりました。そこで、そのことをクライアントに伝えてみたのですが、そう簡単に予算は変えられるものではなく、なんとかこの予算以内で頑張りたいということに一旦はなってしまいました。けれども私は、クライアントの期待に応えるためには予算の見直しが必要だと感じ、クライアントの方に納得してもらうためにはどうすればいいのか、過去に同じような企画をやったインターン生に聞いてみたり、過去の施策の結果を調べたりして、自分なりに考えを資料にまとめてみました。後日、その資料を携えて再度予算についてクライアントと相談した結果、今度は予算の見直しに応じていただけました。イベント当日は多くのインフルエンサーが来場し、クライアントの方にも大満足して頂き、企画は大成功に終わりました。最終的な今回の企画の報告会で、打ち合わせで予算の相談をしてくれてありがとう、たくさん調べてくれた熱意がとても伝わった、次も是非お願いしたいという言葉を受けたときはとても嬉しかったです。

この経験を通じて、「指示されたことをやる」だけでなく、自ら考え行動することがどれほど大きな成果を生むかを実感しました。自己発信力や問題解決能力の向上もあり、この4ヶ月間は私にとって非常に有益なものとなりました。

将来を覗く 5 日間

2年 坂本 篤美

私は、産業翻訳企業で5日間のインターンシップを行った。この産業翻訳企業は、創業が1977年、所在地が東京都新宿区、資本金が9,500万円、従業員数が359名の産業翻訳業界最大手の企業だ。ここでは、5日間をかけて、ヒアリング、提案、受注、マーケティング、営業企画などの主に営業職の方が行う業務を体験した。体験は日替わりの4名3チームで行われ、グループワークを通して、架空の設定を元に取り先役の方や先輩上司役の方とロールプレイングをしながら、業務についての知識や自身のスキルを向上させる内容であった。

ヒアリングとマーケティング体験では、「お客様の状況、ニーズを聞き出す」ということがどれほど難しいことなのかを学んだ。予算、納期、納品形態、部数などを聞くことさえ、最初は思いつかず、先輩上司役の方のアドバイスを元になんとか必要な情報をそろえることができた。また、ここで非常に重要だったのは、お客様の要望に「なぜなのか」という疑問を抱くことだ。無謀な納期や予算を提案するお客様に対して「無理だ」とはねつけるのではなく、なぜそのような背景になったのかを探ることが大事だと気付かされた。お客様の裏側を聞くと、すぐにはわからなかったニーズが見えてきて異なる形でニーズにこたえる提案ができるようになった。そこから次の契約チャンスに繋がることもあった。すべてに疑問を持ちヒアリングをすることは難しいことであり、重要であることが身に染みて分かった。

また、インターンシップ中に何度も教えていただいたのは、誰からの、誰のための情報なのか、つまり情報の主体がどこか、という点を意識することの重要性だ。例えば、ヒアリングした内容を伝えるのは上司になるので、お客様側の課題と社内の課題を分けて網羅的に伝える必要がある。一方で、提案はお客様に向けるものなので内部事情は省く必要がある。課題が発生したときには、それがどこの問題なのか、情報源はお客様なのか自分が調べたことなのか、同僚の話なのか、整理して伝えることの大切さを学んだ。これは、産業翻訳や営業だけでなくどんな場面でも大事なことであると感ずる。

このインターンシップを通して、私はこれまで避けていた営業職の経験が、意外にも楽しかったことに気づいた。また、苦手だと思っていたリーダーという役職も、やってみると自分が生き生きとしていることに気づき、もしかしたら向いているかもしれないと思った。全く興味のなかった産業翻訳業界だが、知れば魅力的な点がたくさんあり、また、そこで働く人が非常に温かかったことから、あまり興味ない業界をそのまま見過ごさずには、知ってみることが重要だと感じた。この産業翻訳企業は業界の最大手であり、そこで働く人が自分の提供するサービスに自信を持っている姿から、小さな業界の最大手企業に狙いを定めるのも有効だと気付いた。また、同じ営業職といっても、サービス営業と商材営業が全く別物だと教えてもらい、自分にはどちらが向いているかを考える良い機会になったとも思う。

今回のインターンシップを通して私は、自分の将来を少し具体的に想像できるようになった。これからさらにインターンシップや業界研究を通して、自分の将来をより鮮明に覗いていきたいと思う。

社会人って何が違う？

2年 中村 紗衣

今回、私は染色加工企業でインターンをさせていただいた。インターン先では、営業職に5日間同行した。営業同行した際には企業先がどのような会社なのか、どのような取引をしたのか、など営業の様子を詳しくメモしなければならなかった。また今回のインターンシップは東京だけでなく大阪でも同時に行われていたので、大阪のインターン生とズームで繋ぎながら1日の最後に必ずメモしたことをお互いに報告しあった。最終日には、「東京と大阪の営業の違い」というテーマで、パワーポイントを作成し、お互いに発表し、人事部の方からフィードバックももらった。

1日目は、インターン先の企業についての説明と、この5日間でやらなければならないこと、営業ではどのようなことをしに行くのかという説明を受けたあとに、営業に同行した。

初日の営業を通して感じたことは、社会人は皆コミュニケーション能力がとても高いということだ。初対面の取引先の人と話す際に、仕事の話だけでなく世間話もするが、今話題になっているニュースの会話や業界についての会話など、お互いにある程度の世の中に関する知識が備わっている前提のもとで会話が弾み沈黙になることがほとんどない。一方私は初対面の人が苦手なため、何を話せばいいのかわからなくなってしまうことが多々あり、初日はこれに一番驚いた。

次に2日目から4日目は、終日様々な企業への営業に同行した。1日で多くて4件回ることもあり、すべて電車と徒歩での移動だったので、3日間汗だくになりながら歩き回った。この3日間で営業職の大変さを実感することが出来た。例えば、営業に行く際に、移動して汗をかいて企業先の冷房が効いた部屋に入る。すると汗がだんだんと冷えてくるが、冷えてきた頃に部屋を出てまた汗をかく。次の企業先に着いてまたさらに汗が冷える。というように、この繰り返しで、かなり体力を消耗した。営業職は大体車で移動するものだろうと思っていた私にとって、この3日間は体力的に疲れでとても苦しく、これを毎日行っている社会人の体力に驚かされた。

私はこの5日間を通して、大学生と社会人の間で「自立」という大きな違いを見つけた。大学生は、出来なくても最悪どうにかなる、友達に見せてもらえれば大丈夫という考えがあるが、社会人にそれは一切ない。できなければ自分でできるまで頑張る。分からなかったら放っておかず分かるまで調べる。といったように、どんなことも自分でどうにかしなければならない。ずっと人に頼って生きてきた私にとって、社会人を経験したこの5日間は、ひやひやすることも多く、とても疲れるものだったが、同時に自分に足りないものに気づかされる非常にいい機会になった。大人になる準備は今からでもできる。今回自分に足りないと感じた「自立する」ということ胸に、どうしたら自立した大人になれるか考えて行動していきたい。

一足はやいスタートダッシュ

2年 生井 友里香

私は8月21日から25日までの5日間、学生マンションを運営する不動産会社のインターンに参加した。インターンの内容は、5日間のグループワークを通して、国分寺にできる新規物件の値段設定と付加価値の提案を行い、発表するというものだった。その途中で実際に手掛けている物件を見に行ったり、本社や部署を見に行ったりする機会もあり、その会社のことを深く知ることができる非常に実りのあるインターンだった。

私がインターンを通して学んだことは、今後の就活においてインターンに向かう姿勢である。

今回のインターンでは、自分が社会に出た際にどれだけ未熟で、どれだけのが通用するのか知りたいと目的を持って参加したが、他の3年生の就活生たちと5日間過ごして、今後、就活に関わるインターンに参加する際にどのような目的や姿勢で向かうべきかを間近で学ぶことができた。

1番感じたことは、5日間で自分の最高のパフォーマンスを発揮することが非常に重要だということである。インターンはその会社の社員さんに一緒に働きたいと思ってもらえることが大きな目的であると感じた。5日間も一緒にいるとその人がどんな人かわかってくる。授業の中でインターンへの参加が早期選考化しているという説明があったが、実際に、社員さんは私たち一人ひとりをしっかりとして、分析をしていた。私の班についてくれていた社員さんは、ずっと眠そうだった同じ班のメンバーにそのことを指摘し、もったいないと注意していた。人数が少なかったのもあり、思っているより自分の行動が見られている、と気持ちが引き締まった。この気持ちを忘れずに今後のインターンに参加したいと思う。また、グループワークを体験できたこともとても良い経験であった。

今回のインターンで初めて初対面の人とグループワークを行ったが、とても難しかった。距離感の詰め方から役割分担まで、何もわからず混乱したが、5日間を通して自分に何が向いているのか、どのポジションがやりやすいのかを少し理解することができた。私は意見をたくさん出したり、仕切ったりすることができないため、白熱している議論の中でその内容をメモしてまとめていた。書紀は、議論を自分の中で整理できるため、そこから意見を出したり、脱線した際に軌道修正したり、資料作りを中心となって進めたりすることができるという利点があった。グループワークの中で自分の役割を見つけることができれば、臆せずに意見を出したり質問をしたりできるのだと気づき、自信にも繋がった。今はグループワークによる選考を採用している企業も多いため、今のうちに練習しておくことができるとも良かったと思う。

2年生で行ったインターンは、今後の就活のためのインターンの予行練習になった。この授業を取っていないければ、就活本番で初めてのインターンに戸惑い、最高のパフォーマンスを発揮できなかった可能性がある。何事も早いうちからチャレンジすることによって多くのことを得ることができ、次に何か行った際により良いものになるのだと学べた5日間であった。

働くことを楽しむために

2年 安田 麻央

私が今回選択したインターン先は、サービス付き高齢者向け住宅及び有料老人ホームの、企画・開発・運営・サービス事業を行う介護業界だ。五日間のインターンシップのうち、初日と最終日はズームを使ったグループワークを行い、より住みやすいと思ってもらえるような高齢者住宅のサービスの提案をした。中の三日間は高齢者住宅に伺い、実際に配膳や買い物同行などの介護業務体験や、スタッフに同行して機械入浴や排泄支援の見学をするという内容だった。そのインターンシップに参加した中で私が学んだことは、二つある。

一つ目は、視野を広く持つことの重要性や、会社内で信頼関係を構築する大切さだ。介護業界は深刻な人手不足や労働量に対して報酬が少ないなどマイナスなイメージを持つ人が多い。実際の業務を見ても、予想外の出来事や高齢者の気分や体調の変化により予定通りに作業が進まないことが多くあった。しかし、どんなに忙しくても社内の雰囲気はいつも笑顔で明るく、三日間で職員の人柄や職場のあたたかさを感じた。同行させていただいた施設の室長に、働くうえで大切にしていることを聞くと、

「人間関係。仕事において臨機応変な対応が求められるからストレスを感じやすいけれど、職員同士の信頼関係が築けているからこそ、そこが居場所だと感じるができる」と答えてくれた。室長は誰かが業務に追われているときは進んで業務を分担し、職員の元気がないときは声をかけるなど、少しの変化にも気づけるその視野の広さに私はとても驚かされた。休憩中も室長が職員を集めて世間話をし、とにかく職員同士の固い絆のようなものを感じることができた。一方、私は大学に入学後に始めたアルバイトで、仕事をより効率よく進め、ミスをしないことを一番に心掛けていた。もちろんアルバイト仲間との人間関係も大切にしていたが、特に忙しいときは業務を優先して周りが見えなくなり、視野が狭くなってしまふことが多くあった。室長の周りを観察する能力と他人を思いやる気持ちが今の自分に足りない能力であり、人を引っ張る役職に選ばれる人の強みだと感じた。職場のリーダーが職員との会話を大切にすることで上下の信頼関係が生まれて職場の雰囲気が良くなり、情報共有しやすくなって円滑に仕事が進み、職員が仕事の中で楽しさややりがいを感じることができると分かった。業界や仕事内容だけで就職先を選択するのではなく、その職場の人間関係や環境も重視すべきだと気づくことができた。

二つ目は、「働くこと」を楽しむためには、業務をこなすだけでなく、自己の成長を感じられるような目標を立てることが大切だということだ。職員の方々は、利用者とのコミュニケーションを頻繁にとり、その日の目標や出来事をためにノートに記録していた。ノートの中には「今日は今まで無口だった利用者さんが笑って話してくれた」など細かい出来事が記されていた。職員の方は「この達成感が仕事のモチベーションに繋がり、記録することでより達成感を感じられる」と仰っていた。淡々と仕事をこなすだけではなく、その先の目標を目指して成長することでより仕事にやりがいを感じられるのだと感じた。この先、日常の中で目標を立てて自己成長を感じられるように心がけてみようと思う。

思い切ってやってみる

2年 山本真衣

私は、ソフトウェア開発を行っている会社で、5日間のインターンシップを行った。インターンシップは、初日の2日間でプログラミングの基礎を学び、残りの3日間で実際にお買い物アプリを作成するという内容だった。また、インターンシップの途中では、実際にプログラマーとして働いている人の話を聞いたり、就活セミナーなども行われた。今回のインターンシップを通して学んだことが、二つある。

一つは、コミュニケーションの大切さだ。インターン先の人事の方は、コミュニケーションを相手に正確に伝える力だと定義していた。このため、プログラミングでは、正しいプログラミングを書くことと同じぐらい分かりやすく書くことも重要であると、強調されていた。その結果、他の人でも理解してもらえるように、プログラムを書くことを自然と意識するようになった。また質問をする時にも、内容を相手に正確に理解してもらえるように気を付けるようになった。私は、プログラミングだけではなく、インターン先の企業やIT業界に関する知識も不十分で、インターンシップの最中は、質問することが多かった。しかし、オンラインで自分が分からないことを相手に正確に伝えるのは、とても難しかった。そこで、今の自分の現状や理解ができていないこと、できていないことを、具体的に話すように心がけるようになった。

二つ目は、挑戦することの重要性だ。私は、春学期の授業でExcelを使うことが多かったため、Excelでプログラミングを学べるインターンシップへの参加を決意した。しかし、IT企業に就職する人やプログラマーを目指す人は、主に理系であるという話を聞いて、自分がこのインターンシップを有意義なものにできるか、参加前はかなり不安だった。実際、参加していた学生は、理系の学生や、大学でプログラミングを専門的に学んでいる人が多く、最初は全然ついていけなかった。しかし、人事の方から、向上心さえあれば、文理や大学で学んだことと関係なく、誰でもシステムエンジニアになれること、実際のシステムエンジニアに文系出身者もいることを伺った。その言葉に勇気づけられ、インターンシップ後半からは積極的に頑張るようになった。また、プログラミングに詳しい学生が多いという恵まれた環境を生かして、分からないことを教えてもらい、短期間でプログラミングの知識が得られたと感じる。これらの経験から、思い切ってやってみることが一番重要であると実感した。

今回のインターンシップを通して、コミュニケーション能力と挑戦することの重要性という新たな学びを得ることができた。このインターンシップ参加以前は、低学年であることや文系であることを理由に、自分が頑張れるのかとても不安だった。しかし、参加後は、視野が広がったという意味で、とても実りの多い経験になったと思っている。現在の私は、低学年であることや文系であることを理由に、エントリーするインターンシップを狭めてしまうのは、とてももったいないと感じる。今回のインターンシップ経験を通して、これからも新たなことに対して積極的に挑戦したいと考えた。

2023 年度 キャリア体験事前指導・キャリア体験学習報告書

発行日 2024 年 3 月 10 日

編集 酒井 理 水谷 敏也 田中 研之輔 松浦 民恵
笹川 暁子 渡邊 妙佳

発行 法政大学キャリアデザイン学部
〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1

無断転載・複製を禁ず